明治三十年一月五日發行

女鑑

第百貳拾四號



東京國光社

女鑑第百二十四號

目録

和泉三郎の妻



女鑑　第百二十四號

新年を迎へて

新しき年立ちかへれば、春立つとにはあらねども、霞ならぬ心、まづ野山に思ひ引かるゝことの多く、鶯にはあらねども、やがて、謠はまほしき心地ぞすなる。いざや謠はん君が八千代を。

そもや、思ひ起せば、本紙のはじめて世の人にま見えそめしは、わづかに昨日のほどの事のやうにもおもほゆるを、關守りもなき月日は、昨日とゆき、去年とくれて、いつしか三歳、四歳、五歳と送り迎へて、うるはしき團欒の變はらぬまゝに、またもや、いま、うるはしき新年を迎へたることの嬉しさよ。

げに久しき此の年月、むつまじく、しかも正しく團欒しての我物語り、花よ、紅葉よ、月よ、雪。春や、秋や、山や、水。鳥よ、蝴蝶よ、鹿よ、虫の音。をりふしの景色、所々の眺め、都に鄙に隔てなく、諸共に語り樂しみたるはかなきすさび

は云はずもあれ、わが日の本の誠の優しき女子として、父母に仕へまつるべき道よりはじめて、兄弟に盡すべき友愛、朋友に守るべき信義、さては、人の妻となりて守るべき操、一家の婦となりて勉むべき營み、さてはまた、母となりて盡くすべき育兒の道、進みては、大君に國家に女子の勵むべき務に至るまで、眞の日本の婦女子として修むべき修身道德の道、眞の日本の婦女子として具ふべき才藝學術など、實に善良優美高尚なる日本女子たるべき觀念智識の物語り、數ふれば、幾千萬の詞ならむ。さるを、露ばかりもあきたまふことなく、說くもの亦倦まず。わが團欒ます〱睦まじく、ます〱うるはしくして、いまかく新年を、諸共に迎ふるを得たるは、うれしさ實に野にも山にもあまれり。いざ謠はむ、諸共に、此の新年を。いざ謠ひて祝はむ、諸共に、此の新年を。いざ祝ひて樂まむ、諸共に、此の新年を。

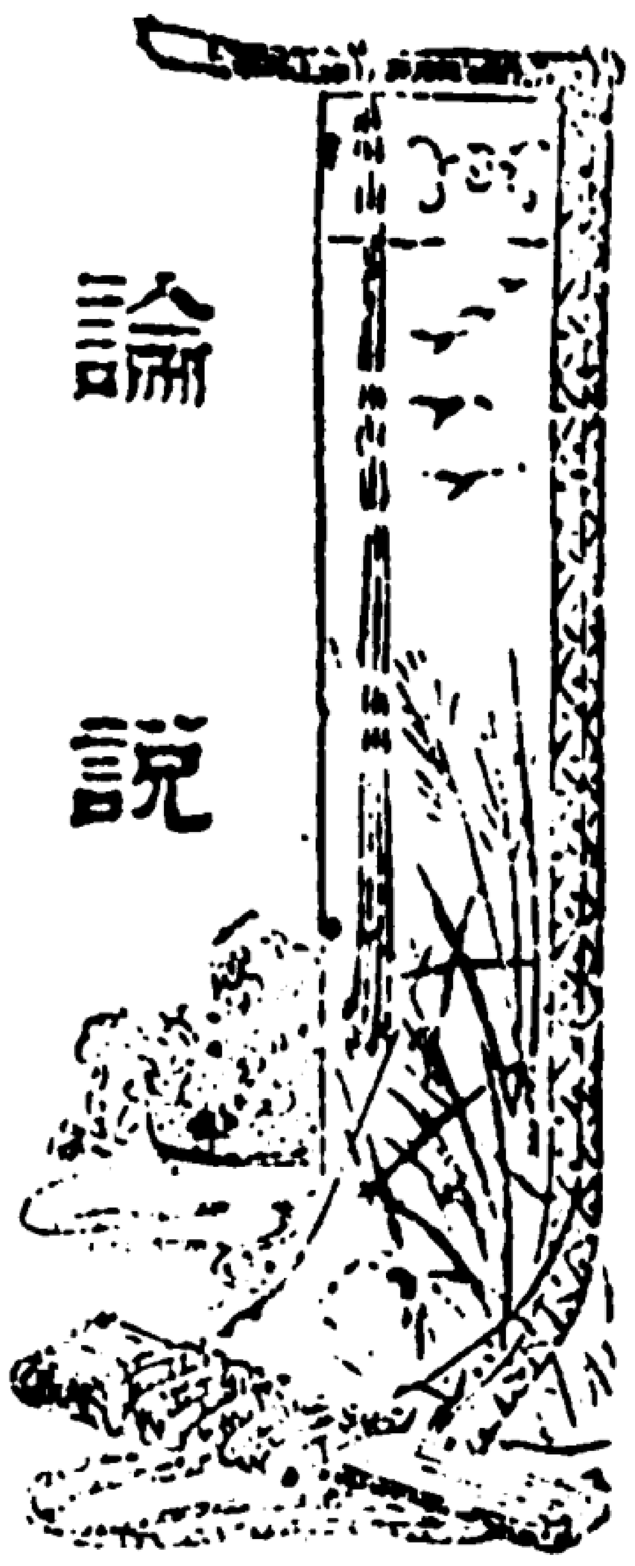
さはいへ、かゝるうるはしき新年を諸共に迎ふるを得たる嬉しさにつけても、大君の御蔭をな忘れ給ひそ。かゝるうれしき新年を迎ふるを得たるは、誠にかしこ

あまねき大君の御惠みを蒙り奉ればこそあき大君の御いつ、高き大君の御蔭、あまねき大君の御恵みを蒙り奉ればこそありけれ。御蔭なくては、いかでかも、四方の海、浪いよ〳〵靜かに、時つ風、枝をならさぬ長閑けききけふにあはん。めでたきあきつ島根に、かくまでむつまじき團欒して、かゝるうれしき年を迎ふるを得べき。今更にはあらねども、これ一重に明らけき大君の御光をあふぎ奉ればなり、高き大君の御蔭ま立てはなり。あまねき大君の御惠みをかうむり奉ればなり。

されば大御惠みに答へまつるべき道は、他にはあらじ。唯、やさしき子たり、むつまじき同胞たり、信ある朋友たり、賢き一家の婦たり、正しき妻たり、まめやかなる母たり、うるはしき國民たり、さてこそ、大君のみめぐみの下に、めでたき秋津島根の女子といはれて、誠に恥かしからぬ者たるべけれ。

此のうれしき新年にあひて、先づいはんと思ふはたゞこれのみなり。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆



論説

年のはじめの心をもて平常の心とすべし

石榑千亦

いかに寢ておくるあしたにいふことぞきのふを去年と今日をことしと。實にも新年の心ばかりのどかに平かなるものはあらし。三杯屠蘇の酒は、爲に寒風の天に鳴るを忘れしめ、一面朶雲の雲は、爲に濃霞地を蔽ふかと思はしむ。かゝる間にあるわれら、いかで誘導せられざらむ、是に於てか、氣のどかに心平かなり。

氣のどかに心平かなる新年にあたりて、例のこち〳〵しき論議はふさはしき事にあらず、さてはきはめてのどかに平かなることをいひてむとす。

かの華族、士族、平民、すべての階級は暫く措き、凡そあるとある人、老幼男女をとはず、貴賤貧富の論なく、新らしき年のはじめに當りて、いかなることをなしつゝあるか、あるは馬車を驅りて、參內拜賀の禮をなし、あるは腕車を走せて、親戚故舊を訪ひ、あ

るは會飲し、遊宴す。然らざれど、歌がるた、羽子、鞠、凧、すべて歡迎せらるゝなり。古禮古式をさながらにいとこと〳〵しきも、山海の珍味山の如くなるも、世を祝ひ身を祝ふなり。剝漆の膳に、雜煮、煮豆などそなふるも、みな世を祝ひ身を祝ふに於いて異なる所なし。而して遠く離れたる知人朋友には、悉く書を飛して、祝意をのべ、いつれをいづれとして、和氣藹々たらざるものあるべき。まことに昨日の鬼も禮に來るといふなるは、これ新年の心の然らしむる所ならずや。

新年の心はかゝるなり。こひねがはくは女子といふ際について、なほくはしくいはしめよ。人の心は面の如し。百人の婦女は、なほ百人の心、各異なる所あるべしといへども、世にはいさゝかの學術にほこり、いさゝかの技藝を鼻にかけて、われは彼所へはゆかじ、いかでさる貧人の妻となるべき、いかでさる醜夫に嫁ぐべきと、わが分際を忘れて、われ一人の天下の如く思ひてある間に時を過して、駿馬の骨を售らむとするものもあめれど、甚しきは既に人の妻となりて後なほ、かく貧しからむとはおもはざりき、かく醜き人ならむとはしらざりきと、貞操を變ずる如きものもあめり。猥に自由結婚を稱へて、淫奔野合を擅にするものもあめり。みな我分際を忘れたるより起れる不平の結果にあらずや。新年の心、斯る折に於いて最必要を見る。靜謐は女子の

德にして、新年の心はいつも靜謐、不平の起るべき餘地あらざればなり。人に交るに於いても、彼遊戲の上に於ける罰として、顔に手に粉紅をぬられて、腹立ちもし、爭ひもする折の如く、腹立つとも誠に腹立つにあらず、爭ふともたゞ時の間、うはべのみの事の如く、平常に於いて、怒らず爭はざらば、いかに安泰なるべきぞ。

あはれこの心をもて家庭に處すればいかに、わが身旣にのどやかに靜かなれば、人に處するも亦然り。然るをいまだ十分に這ひ得ざる稚兒をして、とく快走せしめんと、強くひいて手を傷け、乳汁のみに育つべき幼子に、授くるに米肉をもてして、爲に腸胃の發達を害ふものあり。漸く五十音を暗記せんとする子に論語を讀ましめ、初歩のものに高等の技藝をさとらしめむとする、愛慾の情已むを得ざるものなるべけれど、爲に才智の欠乏を來し、未來多望の子女を驅りて、生れもつかぬ不具の境に陷らしむ。あゝ世間この類多し、心を用ゐざる亦甚しといひつべし。

あはれこの心をもて天下を處すればいかに、われはいつも世人のこと〴〵くが、遊樂に耽りくらせよとねがふにはあらず、たゞ斯心を以て心とすれば、一人の不平もとよりあるべくもあらず、一人の不平なし、一家の不和亦あるべくもあらず、一家の不和なし、父母、兄弟、夫婦、子孫いづれか和せざるものぞ。一族相齊ひ、一郷相協ひ、一

國相同じ、延いては天下治平の域に及ぶや論なし。要は、足ることを知れといふに在り。即て、かののどやかに平かなる新年の心になれといふに他ならず。俗にいはずや、運、根、鈍の三の考なくては、何事もなし得られぬものなりと。その鈍の心よ、急がず、騒がず。變らず。動かざる謂にして、わが所謂新年の心は、やがて其鈍をさす。あはれ、その心をもて心とすれば足らんのみ。急進必蹉跌の恐あり。庶幾くは三思して、徐に大成の曉をまたむことを。しかも舊臘去り、新旭新たに東天にのぼらむとして。心自ら清明なるが如く、日々新なる心をもちて。

吉夢

坂本三七郎

正月の初夢、何ぞ唯、一富士、二鷹、三茄子のみならんや。讀者諸孃、明治三十年の初夢は、知らず果して何等の吉夢を得たるか、幼稚可憐の少女が、追羽根の遊を夢み、二八の令孃が、春衣の着物を夢み、天地の新なると共に、人心も亦別天地の感あり。二十八年の正月は、令孃は父君戰地の苦を夢み、令夫人は夫の恙なくして戰功を全うせんことを夢みしなるべし。二十八年、日本婦女子の夢は、此の如きものなりき。二十

九年忽ちに過ぎて、三十年の新陽となり、四海波靜かに、四民皇化に浴し、御溝水暖にして、白鶴御園に馴れ、松影靈地に映じて、帝壽萬歲の綠を增す。吾人は元旦の天遙かに皇城を紫雲の中に拜して、洪化の廣き、堯天舜日の麗を仰がずんばあらず。二十八年の正月は、國家の安危を夢み、父君の苦戰を夢み、夫君の功罰を夢みたり。今や則ち國威玆に揚り、父君爵高く、位貴し、夫君の胸、勳章加はり、金鵄章耀き、太平を謳歌して君が代の唱聲、松門竹戸の間に多し。此の明治三十年の正月、初夢は、二十八年の夢と、同じからざるべし、知らず讀者諸孃、令夫人は、果して如何なる夢をかトし得たる。吾人は女鑑の初刊に於て、之を聞かんことを欲す。

吾人は嘗て之を故の侍講元田永孚夫子に聞く、曰く、人誠を以て本とす、誠にして通せざるなし。我常に今上陛下に侍講し、己れが誠意誠心ならざるを責む、歲六旬を過ぎて、屢陛下に夢寐の間に拜謁す。是に於て、吾心の少しく誠に近きを知れり。人の誠意は、之を夢寐に忘れざるに於て、初めて眞に入ると、永孚夫子は、嗚呼、眞に碩德の大儒なるかな。陛下の德にして、此の臣あり。此の臣あつて、陛下の德大なる天の如し。吾人は、此の語を聞きて、至誠の情に感せずんばあらず。

吾人は、既に言たりき。一年の計は、春にありと。吾人は更に一轉語を下して云はん

とす。一年精神の發途は、初夢にありて、而して其の初夢は、一に誠に於て、吉凶をトせんとすと。財寶を積むこと、富士の高きが如く、志を得ること隼鷹の揚飛するが如く、思ふ所悉く成すを得んと欲せば、之か基なかるべからず。誠心は、之を得べき本たるを知らずや。婦となりて、一家の主宰たらば、一家團欒、屠蘇醉裡の夢は、一家の盛ならんことを夢み、兒孫の賢にして、榮ゑんことを夢み、子女となりては、父母の健にして、壽なるを夢み、他鄕に遊學する女生は、夢魂飛て故山に歸り、鶴髮童顏の父母を拜し、醒めて孝養を欠く嘆を發し、學を勵みて之を償はんを盟ひ、其の他夫を慕ふは、妻君の夢ならん。弟妹を懷ふは、兄姉の夢なるべく、而して此等の初夢は、眞に誠神の夢魂なり。遠く故山と往來し、近く一家を繞り、學藝の花園に遊び、朋友の間に飛ふは、人倫の樂夢にして、新春の吉夢。何者か之に過ぎんや。吾人は是等諸孃が、至誠の吉夢を分與せられんことを希ふ。此の吉夢を枕頭に得て、一年の發途をトせば、家榮ゑて、身全く、業成て、事遂ぐるを得ん。誠なる哉誠なる哉。以て諸孃が初夢を聞かん。

若し其れ、夢に春衣の人に劣れるを父母に訴へ、夢に歌留多會の多からんことを禱り、音樂會の近きを夢み、更に舞踏會の對手を夢みるが如き、徒らに其の遊戯三昧を夢み

て、吾人が稱して、至誠の吉夢を後にすることあらば、枕頭の福神は、去て隣孃至誠の夢に入らんとす。明治の昭代既に三十春。天長くして、地久し。是の洪化を翼贊して、億萬斯年に傳ふるものは、男子の務なり。而して冥々の中、一家の庭化を受け、之を助くるものは、諸孃の務なり。其の務は誠より初め、其の初は三十春の初夢に於て、之をトせんとす。謹て筆硯を清めて、明治三十年の太平を歌ひ、併せて諸孃を祝して、且之を戒む。吾人の說をして、癡人夢を說くとなさずんば、則ち幸甚幸甚。

女子敎育一斑（三十二）

三輪田眞佐子

上に述ぶる六つのものは、やんことなき婦人より、しづのめに至るまで、かりそめにも、女子と言ひ得んものには、必ずなかるべからざる智識なり。故に如何なる種類の女學校も、かゝる智識を專ら養ふべし。なほ特別の目的を有つ女子だに、大概かゝる智識を學びて後に、專門の學術を修むべし。

しかし、中等以上の女子は、その位地を全うせんため、相當の學識を養ふべし、近來は著しく學事進步して、學問の世界となりぬれば、學識なき女子は、おのづから一家の實務を果すに不便なるのみならず。交際上、此にまれ、彼にまれ、踧踖躊躇する傾

あるめり。甚しきは、人より冷遇せられて、物の數に加へられざることもありとかや。むかし、村上の御門、宮女の御方々へ、「あふさかも。はてはゆきゝのせきも。居ず。たづねてとひ。こきなむかへさじ。」といふ歌を、賜ひける中に、廣幡の御息所は、才ことに秀でさせ給へればにや、たき物をぞ、進らせ給ひたりける。御門の御覺えわきてめでたかりけり。されば、いづれの御方とかやは、いみじく去たてゝ、參り給ひけり。こはこの頃、流行せし、沓冠といふ歌の類にて、御息所の答へ奉りし如く、あはせたき物の御用なるを、この御方は、戀歌と思ひ誤りけん、かく淺ましきわざをなし、反りて御門よりなこその關も、あらまほしくなん、おぼされたりける、とぞ。

一條の御門、雪見の御宴、あそばさせられけるとき、香爐峯の雪は、如何に、とのたまひけるをば、數多の女官、候ひければ、誰も答へ奉るものなかりけるが、淸少納言は、學識豐かなるを以て、忽ち白居易の詩に、香爐峯、雪撥簾看、との句あるを思ひ出でゝ、從容と御簾をかゝげ奉りしかば、御門の御感、まさらせ給ひけり、とかや。

これらを、史上の一話とのみ見しは、既に昔のことなりけり。今は開け行く、御代のみめぐみ、あめが下に普きをもて、藻鹽やく海人の女も、木こりする樵夫の子も、あるは歌の道をたどり、あるは文の林にわけ入りて、おのがじゝ、學識を養ふことはなり

ぬ。されど中等社會の婦女にして、もし學識なきものあらむ、到底その位置を有つこと能はざるべし。

惜哉。一時僻りし、西洋にのみ、模擬する女子の學風に懲りけん、女子の學識をど、あらずもがなとする反動の說、行はれて、遂に一部分の父兄は、女子の主として修むべきものは、裁縫及び絲竹などの、藝にこそと、わざとなから、精神を養ひ、又は腦髓を窒にせしむる學識を顧みざるものもあるは。

れのれは、女子の裁縫を學ぶは、誠に必要にして、大に奬勵すべきものと信ずれど、かゝる手藝のみを以て、安んずるときは、往時のごとく、單純なる社會の母、もしくは妻としては、妨なからんも、目下の如き、復雜なる世に立ちては、なか〳〵主婦の任務を盡すに堪へざるべし。試に見よ。手藝のみを修めて、學識を顧みざる女生を、一瞥邪氣なうして、可憐なれど、暫く談ずれど、志すところは、朝な夕な、身を裝飾するに止るなど、概ねその心事、卑俗なるを知らん。かくてはなどか、高尚なる心の良人と、琴瑟相和するを得ん。

蓋し、今日とて、學識ある婦女少からず。寧ろ比較上、その位地より、高き學識あるものさへあり。されど、かゝる女子の多くは、この學識を利用して、自活のよすがと

するあり、おもふに、止むを得ずして、玆に至るは、不可なからんも、父母たるもの女學の必要は、如何なる點にあるか、を知らずして、徒らに自活をのみ目的として、愛孃に高尙なる學識を敎ふるは、可なりと言ふべからず、如何となれば、おのおのの女子にも、學識あるべしといふ所以のものは、品格を高め、女子の任職を全うせしめんが、ためなり。

若し、女子の學識を以て、自活の目的とせんか、おのづから、位地低き女子のみ、學識を積みて、最早衣食住に心を勞する患なきものは、學ばざるに至るべし。これぞ、本末輕重を顚倒することの甚しきものなり。如何となれば、普通の女學は、高等の位地にあるものほど、高尙なることを修め、以下地位に準して、次第あることこそ、人を敎育する次第なれば、彼の自活のため、學識を養ふ如きは、女子一般の目的にはあらじ。然るに實際の情態は、地位低き女子ばかり、高尙なる學識を備へ、反りて、地位高き婦人の、學事淺薄なることこそ、うたてけれ。をさ〱金錢のため、說を曲げ、大道を破りて、小人にこび、尊き學問をして、土芥よりも卑しからしむるものは、必竟地位高き人に、大儒なくして、地位低き人に、小儒多きを以てなり。

玆に年もかへりぬ。定めて讀者の御心も新ならん。いざ年と共に、いそしみはげみて、

日夜机上の塵を拂ひ、學識ある婦女となりて、各自の地位に恥づるなからんことを誓ひね。おのれ今五十路の坂を越ゆれども、老を言はずして、學ばむとおもへど、若木の雛たちは、猶更ならん。

おほかたの人のこゝろの長閑さを年たつ今朝のわが身にぞしる



史談

和泉三郎忠衡の妻

臨井ふく子

左右前後皆正人なり、その身の正しからざるを欲するも何ぞ得べけむ。ましてその性善、その質美なるが、正直なる親のもとに生ひたてられ、忠信なる同胞に生ひまじはり、しかも栴檀の二葉よりかをり異なる夫と、身をも心をも一つにと、かしづきつかふる婦人、いかでか貞實ならざるを得む、節操ならざるを得む。げに佐藤の庄司元治、その身は、武藝の達人にて、その名當時にめでたきに、その嫡子なる三郎兵衛嗣信、次男四郎兵衛忠信、二人の兄弟、また世に知られたる忠勇絶倫の武士なれど、その妻二人

もまた古來まれなる孝貞の婦人にもて、よく姑を慰めたりけり。その人々の中に生ひたてられたる忠信の妹女、これまた兄、嫂にれとらざる至誠至操の女子なるも、うべや。此の妹女は、奥州清原の秀衡が子、和泉三郎忠衡が妻となりて、夫妻の間もむつましく、二人の子まで設けて、生ひ先きをたのしみしに、はかなや、一朝、よこしまなる嵐をふせがんとして、親子四人、深みどり淺みどり、生ひさきもこもりたる小松もろともに、吹き折られたるいとほしさよ。

此の忠衡の兄弟四人ありけり。兄錦戸太郎は、常によき馬を好みて、山野を乘りまはる事をつとめ、元良の冠者は、専ら女子を友として遊ぶ事を好み、伊達の次郎は、山川の漁獵を好みて他の事をせず、何れも文學の道などは嫌ひて、學ばせらるゝも習はず、只他の業をのみ事とせり。ひとりこの泉の三郎ばかりは、いたく文學を好み、夜を日につぎて怠らず學び、また武具を好みて、よきものあるときは求めきたりて、自ら試み、刀劍などもよきものは人にもゆづりわたへて、宜しからぬはくだき折りて捨てたりとぞ。

ある時秀衡、子ども等の心をためしみんとて、秋の末つ方、金華山へ小供等を伴ひ行き、山上に席をまうけて、山河の風景を眺望し、子供どもをはとり近く呼びあつめて

申しけるは、何れも見ゑ、遙なる彼方の山の尾上に、ひと本の櫻あり、今を盛りと見ゑて、花の爛熳としてさきこぼるゝさま、げに白雲か、霞かとばかりにあやまたれぬ。そちだちの目にも嘸かし見ゆるならむと申されけるに、皆のび上り、立ち上りつゝ、如何にも父君の仰せの如く、櫻花今を盛りと見ゑて、うるはしう見ゑ侍りぬと、何れもはめのゝしる中に、和泉ばかりは暫くながめつれども、櫻花とおぼしきものも見ゑざるに、父の傍に至りて、仰せに從ひ、見參らさせたれど、わが眼には花とおぼしきもの、少も見ゑはべらずと云ひけりとぞ。その日はそのまゝ、うちつれて歸りけるが、孫衛心に思ふやう、花なきをありと云ひて、彼等が志を見けるに、四人はみな實はなき花を、我にへつらひてありと云へども、泉ばかりは正直に己が心のまゝを云へるは、栴檀のめでたき生ひ立ちも見ゑて、いとゆかし。勇は錦戸すぐれたれど、諂ふ心あり、元良は柔弱、伊達は義あるに似て勇なし。たゞ、たのもしきは、泉かな。勇は少けれども誠あり、義あり。たのもしきは泉ぞとばかり、げに子を見るは親に如かず。はたせるかな、和泉の三郎忠衡、よく義を守り、忠をはげみぬ。去る元暦のむかしに、源氏、平家を盡くうち平らげて、亡ぼしはてしは、賴朝よりは、むしろ、九郎判官源義經の功なりしを、武運拙くして、兄賴朝の惡む所となり、あやしきうたがひかゝりて、そ

を云ひとく事能はず、是非なく奥州に下り、秀衡をたのみて高館の庄にしばらくありけるが、秀衡九十歳にあまりて、もはや死せんとするとき、己が子供等に遺言して曰く、今我れ死せば、頼朝必ず此の國をうち從へて、義經公を捕へんとするは必定、ます鏡かげにうつらずとも、此の秀衡のたましひには、とくより見ゆるなり。必ずさる事あらば、判官殿を大將として、白川二所の關をかためて、人々心合せて防きなば、十年攻むるとも陷ることは、よもあらじ。義經公は我が主君なれば、そちらにももとよりやんごとなき主君、必ず二心をないだきぞ。もし頼朝の武勇を恐れて、彼方に心をよする事のありなば、城は内よりくづれて、頼朝が履取とされんは必定、ゆめ此の事をな忘れぞ、武士の子孫ならば、決して露の命ををしみて、道なき人の履取りとなりぞ。清原のきよき家名くれ〳〵もけがすなと、人々に言葉殘す中にも、たのもしきものと、かねて思ひこみたる三郎忠衡には、とりわけて、義經公をゆめな捕へさせ參らせそと、返す〳〵頼みつゝ、百歳にも近きつくも髮、をしくばゆめあらぬを、たゞ此の事にのみ心を殘してみまかりし秀衡の心ぞいたはしき。

はたして頼朝、秀衡が子供に、義經をうつべしと云ふ敎書を下されたり。兄弟五人評議する中に、忠衡云ふやう、この事ゆめ〳〵あるべからず、一度主君とたのみ參ら

したる君、如何なるうたがひに包まるゝとも、もと罪なき御身、例へよしはれぬうたがひあらぬとて、さばかりに大功を立て給ひしを、しかも兄として殺ろさんは非道なり。あはれや判官公、さばかりの勇略もて、平家を亡ぼし、我が大功、むなしく兄にうばはれ給ひ、しかもあらぬ名をとり給ひしくやしさ。武士のもだしがたき御たましひを、ぬきもはなちもし給はぬは、たゞ兄君どればせむならん。さやうに弟の道をまもられたる君を、いかでやみ／＼うち奉らん。亡き父の返す／＼もくりかへし給ひし御遺言、評議相談も何の用ゆる處かは、如何に兄君たち、弟よ、さにはあらずや、此まゝになし置きて、重ねて非道の命下らむ、城を楯として、有道の主君を守り、先考の御魂休めまつらんと、心を決してのべけれども、四人は、とかくに鎌倉の權勢に恐れて、城によらんなどの勇氣更になく、義經公は主君とは云へ、鎌倉殿の御弟、まして彼方は勅宣、院宣をかうぶるものを、それにそむきまつるは天皇への不忠、しかも奥羽二州を以て六十余州の追捕使に向ふとは、蟷螂の斧を以て、龍車に向ふに異ならず、家を亡ぼし、身を亡ぼすは必定、しかして遂に義經公をかばふ事を得ず、されば鎌倉殿の命に從ひて、義經公を討ん方、まさり侍らん。何れ拙き判官公の御武運、討ち奉らずとも、つなぎ得られん御玉の緒かはと、一人のぶれば、三人ながら、げにと

ばかりに同ずるに、忠衡はあさましく、まだ先考のおくつきもかはかぬ程に、はやも遺言を空しうするは不孝不忠とばかりに、衣の袖をしぼりて爭へども、四人は從ふ景色なきに、忠衡今ははらだゝしく、口惜しく、さる不忠不孝のものは兄弟とても何かせん。只今よりは敵なり、うちとらんとならむ、うちもどりぬ。我れ一人なりとも、如何で空しく主君を渡さんやとて、つと座を起ちて、已が館にぞ歸りける。

あさましや、泰衡はじめ三人の兄弟は、まづかたくなる忠衡をうちとりて、後に判官をも心安く討たんものと、三千餘騎をもよほして、平泉におしよせたり。

忠衡が郎等みなおち失せて、とゞまるは僅に二十七騎、甲冑して防ぎ戰ひけれども、彼方は多勢、はらへどもくつきず、みな討れぬ。忠衡、妻女に向ひて、早う何方へともおち給へと云ふに、妻女きゝて、あなや、君は世に忠孝の道を守り給ひながら、妾をも未練不義不貞の妻となし給ふが、兄二人もみな、判官公に玉の緒をさゝげまつりしに、君が妻として、嗣信忠信の妹として、などて、妾、卑怯にも命ををしみ侍らん。をしみてうきめを見んよりは、君ともろともに、主君を守り、君におくれぬ妻ともなりてん。女子なれども日來たしなめる薙刀の一手、御目にかけ奉らんとて、鎧とつて肩にひきかけ、いそぎかぶとの緒をしめ、薙刀うちかざして、いさましう出でたちし

が、やがて夫に向ひ、如何に私が夫、子を殘しれきて、人手にかけてうきめを見せんよりは、たゞさし殺ろし給へ、心安く身をつぐさん。子供等も親に先き立ちて、忠義の道にはつるは、中々にうれしうや候はんといふに、忠衡きゝて、いしくも申されたるものかな。さらばとて、二人の子をさし殺し、流石夫婦もろともに、しばし涙にかきくれ居たりしが、敵、間近くせめ入りしに、二人は涙を拂ひ、今は心にかゝるものなし、是を最期とばかりに、二人ひとしく斬て出でつゝ、四方、八面、さながら猛虎のあるゝが如くかけつ、めぐりつ、拂ひつ、なきつ、はては夫婦とも幾十のいたでを負ひ、今は之れまでとて、城に火をかけ、夫婦もろともにこゝろよく自害してけり。義經は此の折り忠衡に助けられて、蝦夷へ逃げのびたりと云ふ説、その頃専らなりき。あはれ、忠衡及びその妻女、夕のけぶりときえはてたれど、忠に、孝に、貞に、人間第一の道をふみて、その美名は千代もくちせず、げにその夫にして、此妻ありとやいはまし。

鐵屋鶴女

蕉風仙史

つる女は、鐵屋吉右衛門の妻なり。年十四にして、とつぎ、いとよくその夫に事ふ。三

年をへて一人の子をまうけたりしが、うれしと思ふほどもなくして、おなじき年に夫病みて身うせぬ。されどかなしきながらなにくれ後の事どもしをへてけり。かくてありけるほどに親族のものども、相たばかりて、いへるやう、今夫みうせて、子あれども、たゞはづかに一歳なり。またよき婿かねをゑりもとめて、鶴女にそはせてんといふを、鶴女きゝて、うちなきていふやう、妾年まだ少かれども、女としては、二人の夫に仕ふまじきよしをきけり。なほこゝに夫の遺せる子あり。妾力のかぎりつとめまりて、良人にかはりて、舅につかへ、且この子をはぐゝみおほしたてゝんを、といふを、人々感じ合ひて、その心のなみならずかたくして、動かすまじきをさとりて、やみにき。これより後は、舅に事ふることのまめ〳〵しさ、良人のありし世にこえたり。かくて一年ばかりありて、親族のものども、その年まだわかくて、女ながらひとりして家を治むるが、見るだにあはれなりとて、又さきの年の婿のことをはかる。しかれども鶴女かたくちかひて動くけしきもなきに、困じて止みき。天明のころ病にかゝり、日に重りゆくに、人々枕頭にありて、いまはのをりに、もし思ふことあらば、遺言してよといふに、鶴女いふ。今は言ひ遺すべきこともなし。たゞ不幸にして、舅に先ちてみうするか恨なり。ねがはくは、大斂の日にもわが膚には男子は手をたになふれそ

といひをへて、いきたえにき。この時年わづかに廿七なりきといふ。鶴女不幸にして、年わかくて失せたること、かさね〳〵あぢきなし。しかれども、夫みうせて、年まだすくなく、子さへありながら、おちなく舅に事へたること、千歳のかゞみなり。舅に孝にして、夫に貞なる稱するにたへたり。かばかりの心根にあらざれば、家もおだやかには、え治まらじ。世には、夫うせたりとて、老いにたる舅姑をかへりみず。わが子の行末をも思ひはからずして、たゞ目のあたりにまよひ、或は離婚し、あるは二夫につかへて、身を全くせぬものもあめり。心はかたくもつべきものなるべしかし。



たちぬひ

西山たい子

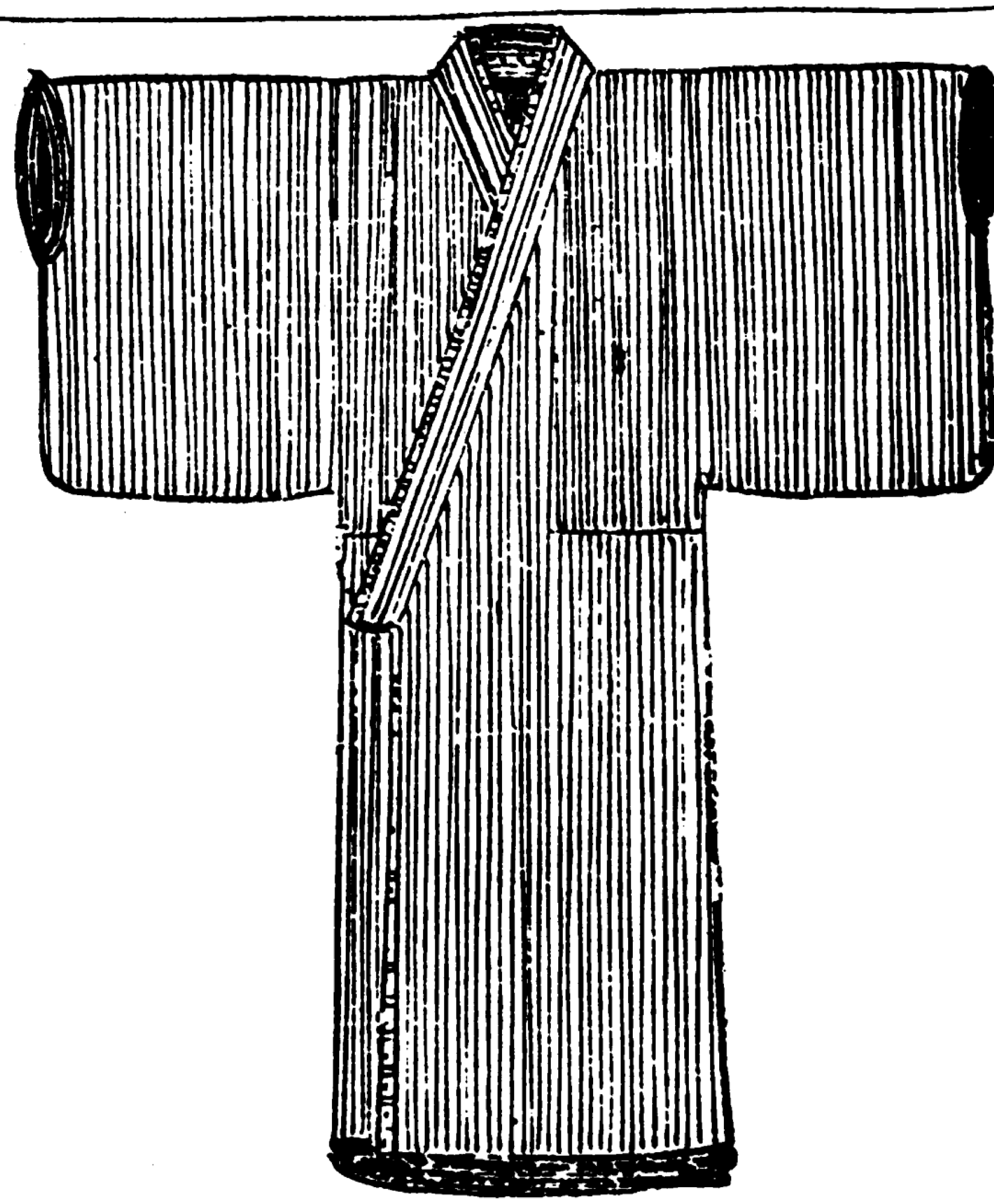
（六十）絹地單物の縫ひ方

絹ものも、木綿ものも、ぬひ方はおなじなれど、そうじて絹はすぢのつきにくきもの故、ぬひ初めの人は、袖口など最初にしつけをかけおきて、後にこまかく絎け、また背ぬひ、脇縫、衽ぬひ、等もよくふ

せて、袋のいらぬやうにとゞむべし。つま下裾ぐけも、最初によく形をつけ、しつけをかけおきて絎る方よろし。縫ひ上らば、ひのしにて、縫ひめをよく平にのすべし、絹地はあまりにぬひかへしては、針目めたち、また一度あしき條などつけては、容易くもとにならぬもの故、最初によく〳〵注意して仕立つべし。單物に限らず、袷綿入れ、羽織、半纏、何にてもさやうに心得べし。

(六十一)男物重の縫ひ方

上着の寸尺は、その人に應じて、よろしきやうに縫ひ、下着はその上着よりは、袖丈け襟丈を三分つめ、後巾を二分、前巾を一分づゝつめ袖巾、袖口、褄下、ゆき、丈けは、上下同じやうに縫ふべし。男物のぬひ方あしき、或は寸尺のそろはぬは、目にたちて見ぐるしきもの故、よく〳〵心を用ゐてぬふべし



造花

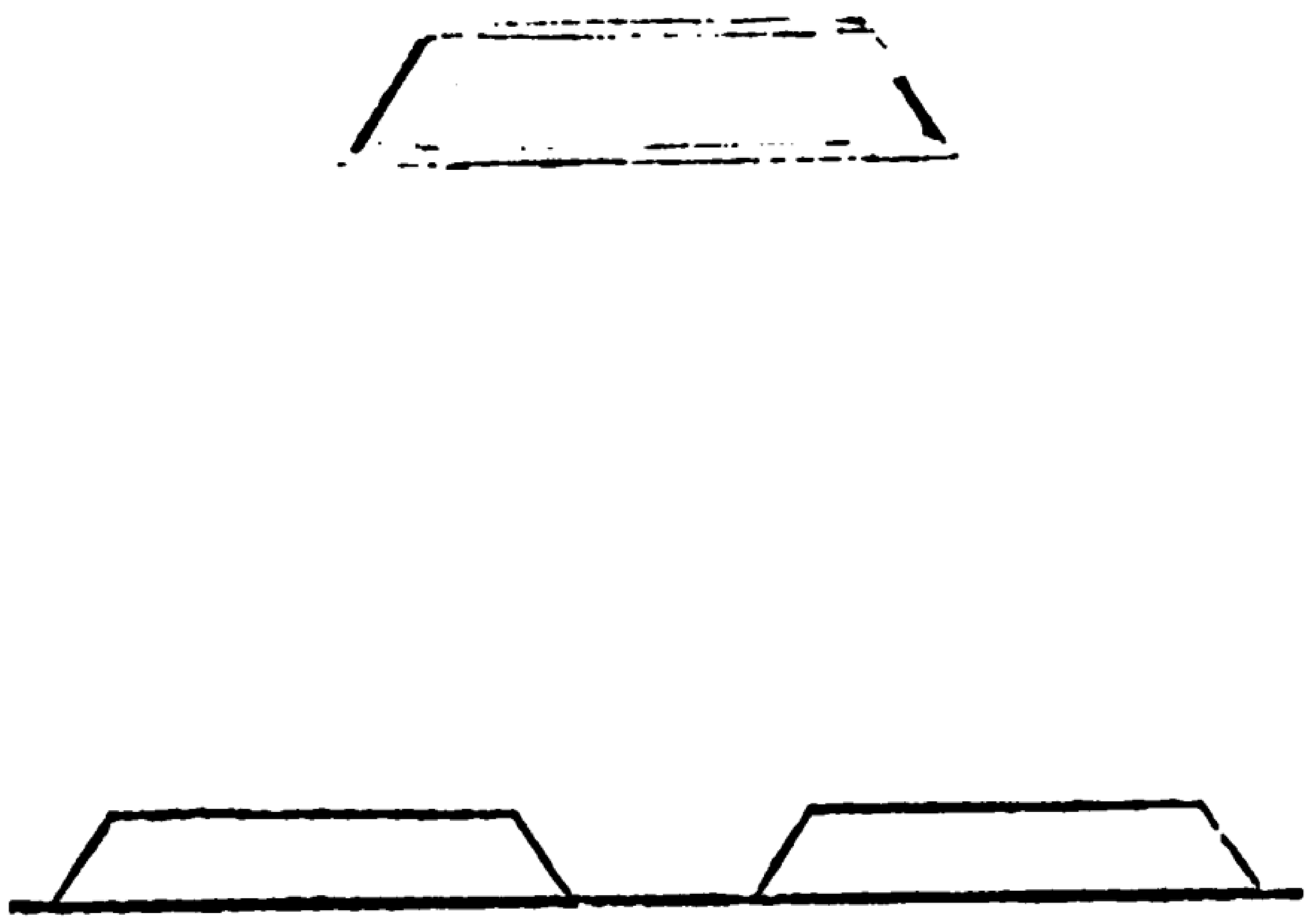
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

松

葉の造り方。葉は薄美濃紙を普通の葉の色（微温湯五合計りの中に「マセンダ」五厘を投じて能く溶かし、之に「オウラミ」五分を入れ、次に「グリン」一分五厘を混じ、又色の褪せざる爲に明礬少許を加へたる液）に染め、よく實物と見合せて、倘薄きときは、「グリン」を多く入るべし。染め上げて乾きたらば、第五十圖の甲の如き形にして適宜の大さに數十枚を造り、之を乙の如く針金（鐵ならば細小なるもの、眞鍮ならば稍太きもの）の兩端に、其の間凡一寸許を距てゝ二枚を巻き付けて糊を引き、倘之に亞比拉亞護謨をぬりて、光澤を出し、乾きたらば、之を二つに折り曲げ、其まげたる處に、「カストラバル」にて染めたる薄美濃を、巾一分ばかりに斷ちて巻き付け、斯の如くして數十本を造り置くべし。

第五十圖

甲



次に葉の上端に在る若芽（みどり）を造るべし。先づ薄美濃紙を茶帋にて染め、之を一分五厘の巾として、適宜の長さに斷ち、之を第五十一圖の甲の如く、横に少しづゝ切り込みを付けて、太き鐵の針金に巻き付けて、乙の如くすべし。之を適しき長さとして、三本を合せ纏め、其の元に葉を付くべし。

葉を付くる莖は、鐵の針金を三寸ばかりの長さとし、之に「カストラバル」にて染めたる美濃紙を巻き付けつゝ、前に造りし葉を適しき配りに、凡三十本ばかりをつくべし。

第五十一圖

甲

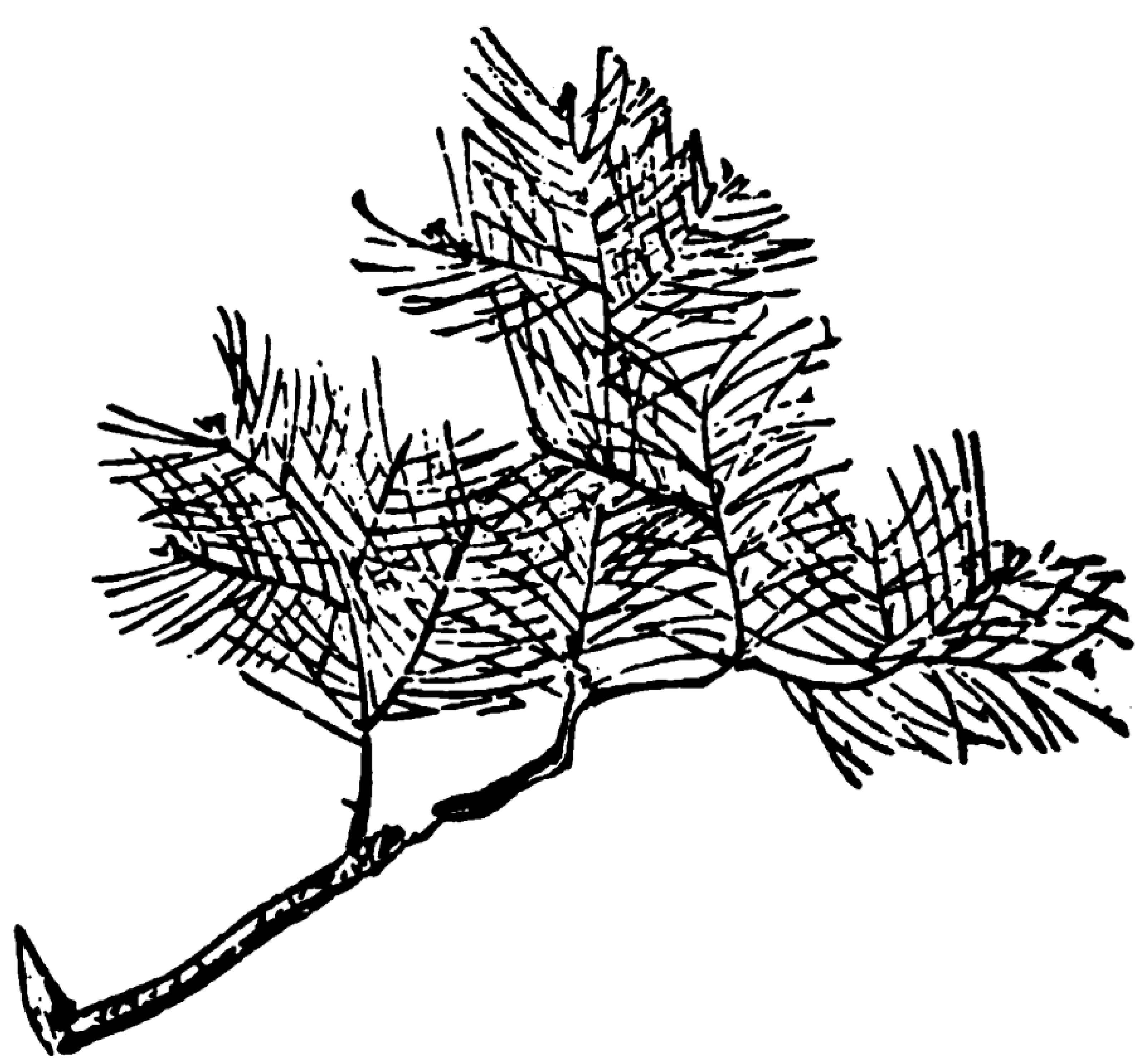


乙



之を枝に纏ひるには、其の幹の中に竹の細く削りたるものを入れ、「カストラバル」にて染めたる紙を以て其の上を巻き包むべし。

第五十二圖

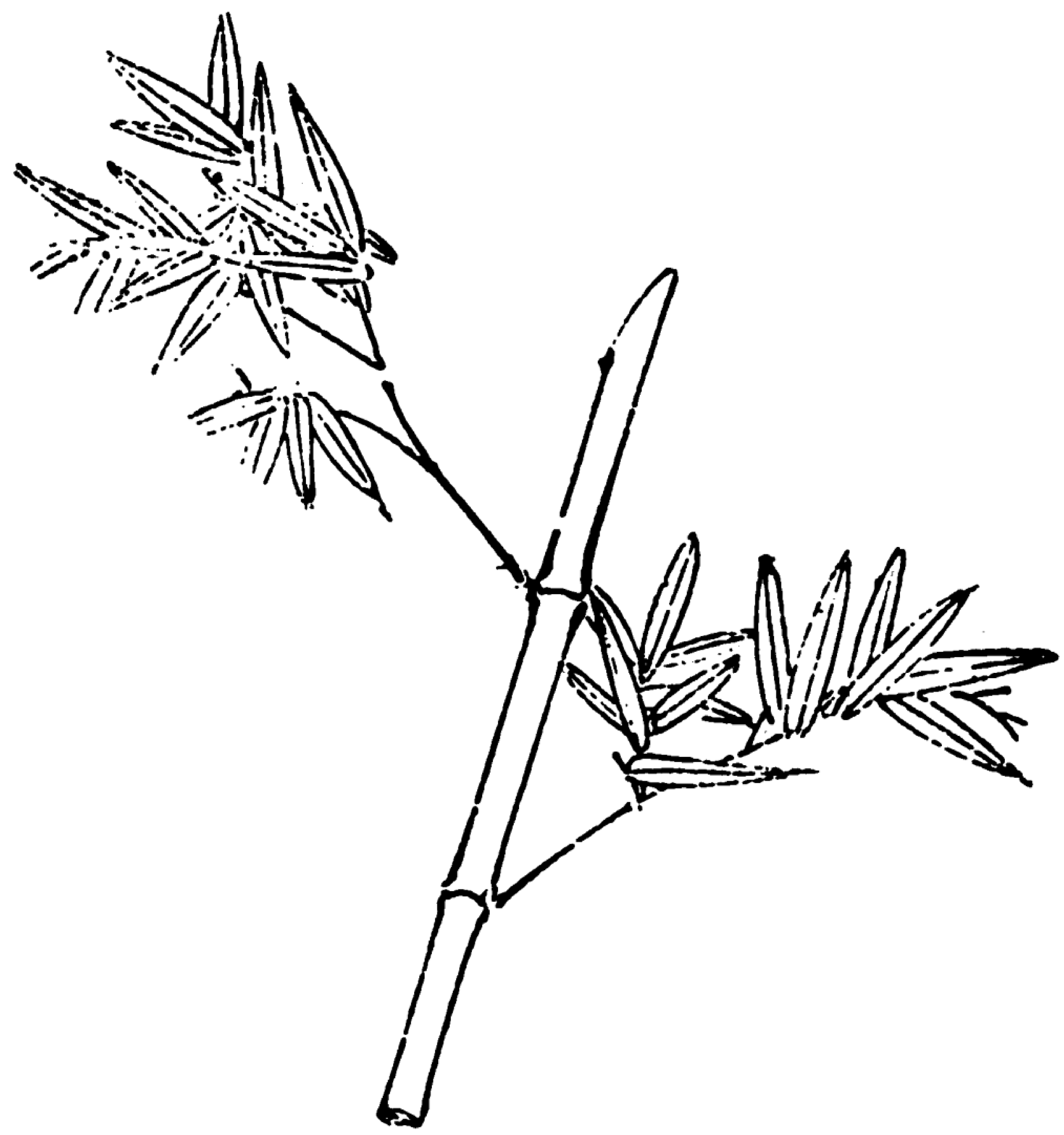


竹

葉の造り方。布は、絖又は寒冷紗を用ひて、何れも姫糊を少しく濃く引き、造らんと思ふ實物を取り來りて、其の形をとり、之に合せて大小種々なるもの數十枚を造り、之を薔薇の葉と仝じ色に、「オウラミ」六分、「グリン」二分五厘の割にて溶したる液にて下

染し、乾きたる後、其の表面を縦に、中央より漸々兩傍を薄く、「セルリン」と「レモンエルロー」とを等

第五十三圖



分に合せたる染料にてぼかすべし。乾きし后、眞鍮の針金に青紙を卷きて、之を葉の裏より付けて莖となし、ぬめなれど其の儘、寒冷紗なれど鏝にて光澤を出すべし。又熊笹なれど、葉の縁を白く染め殘すべし。幹には山吹の枝の恰好よきものを用ひ、節となるべき處に針金を二筋並べて卷き付け、此の上より全体に青紙を卷き付けて糊を引き、乾かして后、亞拉比亞護謨を引きて、光澤を出すべし。この幹に葉をつけ纏むるには、實物を參照して、好みのふりに、枝を節々に差し込むなり。第五十三圖の如し。

だいどころ

洋食を喫する心得

洋食は近頃愈々流行し、何人も大抵之を嗜まざるものなく、日本料理の間に交へて、之を用ゆるに至れり。されど、其の食し方に就ても、別に方式を要せ

ざるもの丶如し。されども、純粹に洋食のみを供する坐席に臨みたるときは、矢張洋食を喫する方法に從て之を喫せざれど、何となくわかず見ゆものなれど、其の方法を心得置くも、また無益にはあらざるべし。逐號、洋食調理方をしるす折柄、少しく岐路にわたれども、之を喫するに當りての心得を記すになん。

第一、人々の席定まりて食事にかゝらんとするときは、先づ麵包の下にしきある手巾を取り、麵包をもとの如くに置き、扨て其の手巾を展げて膝の上にかけ、それより食事にかゝるべし

麵包は他の食物の間に食すべし。最初に食するは無禮にわたるなり、亦た之を食するには、手にて裂くべし。「ナイフ」を以て切るべからず。

麵包につける「バタ」は、初め見計ひて好き程を自身の麵包皿の片隅に取り置くべし。麵包を食する度毎に「バタ」の器より取るべからず。

「スープ」を吸ふときは、右の手に匙を持ち、左の手を皿に添へ、汁の少くなるに從ひ、少し皿を傾むけて掬ひ吸ふべし。必ず匙の横より吸ひ、又たは音をさすべからず。扨て之を吸了り、又は半にして止めんとするときは、匙を皿の中央に伏せて、匙の柄を皿の縁にかけ置くべし。

食事中しばらく手を休めんには、「フオーク」を仰向けにし、「ナイフ」の刃を内にして皿の中に置くべし。

又た後品の來るを待ときは、「ナイフ」「フオーク」共に之を麵包皿にのせ置くか、又は之を元ありし如く皿の兩側に置くべし。又「スチウ」杯の如きものを食して、汚れたるに、取替を望むときは、「ナイフ」の刃を外にし「フオーク」を伏せ、眞直に皿の中に置く

か、又は兩器の尖を少し重ねて柄を開かせおくべし。



新古今和歌集講義（四）

鹽井正男

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

けふといへばもろこしまでも行春を
　都にのみと思ひけるかな

○はし書に入道前關白とあるは、法性寺藤原忠通の事なり、忠實の子にて、詩文にすぐれ書風もめでたく、和歌は殊に堪能なりしなり。

○俊成、藤原俊忠の子にて、藤原定家の父なり。歌道を藤原の基俊に學び、また源の俊賴の歌風を慕ひまねび、しかも遂によく二人の上に出で丶、いみじう堪能の歌人なりしかは、よく人の知る所にて、詳しくいふべき要もあらず、後白河皇の勅をうけたまはりて、千載和歌集をさへえらびたる人なり。○今日といへば「今日と申せば」といふ意なり。○もろこしまでも行く春、立春は、都にも、鄙にも、さては外つ國にも、何處にも皆く來るなりといふ意にて、「もろこしまでも行く春

といへるなり。までもの詞に心をつけて見るべし。本居の宣長翁が此の行く春といふ詞を難じて、此の歌の題は立春なるに、行く春といひてはいかゞならむ。行く春にては、三月盡くるころの歌にも成りぬべし。など立つ春とはよまれざりけむといはれたるは、翁にも似つかはしからぬ難といふべし。行くといふことは古へは、今いふ行くの意にのみあらず、今ならば「來」といふべき意にも用ひたり。されど、此の歌の行く春も「來る春」の意なり。翁のいへるやうに難せずとも、よろしかるべし。○かな、感嘆の意をあらはす助詞にて、俗にいふ「ヨナア」とか「ワイ」といふやうなる意なり。

○一首の意は、今日立春と申せど、春は何處にも至らぬ隈なく來る春なるに、それを、わが心のをかしさよ、たゞ都にばかり來れりと思うたワイと感じうたへるにて、めづらしき都の春をよろこび思ふ心より、よそにも普く春の來ることを、ふと忘れたる心のあどなげなるをうち笑ひよめるなり。

題しらず　俊惠法師

春といへど霞みにけりな昨日まで
浪間に見えしあはぢ島山

○俊惠法師、源の俊頼の子にて、歌は極めて巧みにて、父の子たるに恥ぢずといはれたるほどの人なり。○春といへど、「春といふからして」といふ如き意なり。○霞みにけりな、などいふは、感嘆の意をあらはす詞にて、俗にいふヨナアの如き意なり。されど、霞んだよなあといふ意なり。○淡路島山、淡路島といふと同じなり。

○一首の意は、昨日までは浪間に何のけしきもな

く見えたる淡路島が、春が來たといふからして、今日は霞んだよナア、爭はれぬものなりと、けしきのかはれるにつけて、春の來れるをめづらしくよめるなり。

西行法師

岩まとぢし氷もけさはとけ初めて
苔の下水みちもとむらむ

○西行法師、佐藤義清のことにて、文武の才藝に達し、鳥羽上皇に仕へて大に寵遇せられたるが、はやく世を厭ふ心ありて、わかくして遁世し、西行法師と稱したるなり。和歌を好みて顯密の敎も和歌を學ぶにあらざれど、よく其の奥に入る能はずとさへいへるほどにて、その才吟名詠世に傳へられたるもの多く、今更にいふ要なし。その集を山家集といふ。○岩間、岩と岩との間なり。○苔の下水、「苔の下水となりて」といふやうに詞を加へて見るべし。苔の下をくゞりゆく水となりての意なり。　みちもとむらむ、流るゝ路をたづぬるであらうといふ意にて、らむは推し量りいふ意をあらはす詞なり。

○一首の意は、岩と岩との間をとぢて居りし氷も今日は解けはじめたり。されど、苔の下をくゞりゆく水となりて、流れゆくべき路を求むるならむといふ意にて、心も詞もいと巧みなる歌なり。本居翁は岩まとぢしの句の一字あまりたるをきゝぐるしといはれ、また、もとむらむといふ語、何のよせなしといはれて、此の法師の歌此の病つねに多し、かゝる所此の法師の口つきなりなど難せられしが、ア、イ、ウ、エ、オ、の五音のあまることは、歌には古へよりとがめぬことにて、またもとむと

いへるは、心なき水を心あるものに見なしていへるにて、いとおもしろし。それのみならず、とぢしといひ、さてとけ初めてといひ、さて路もとむらんといひし詞づかひの巧みさよ。表にはたゞに氷のさまをいへるやうにて、裏には何となう深きことわりの心をこめたる、いと巧みにおもしろからずやは。（未完）

漢文學講義（二）

大林弘一郎

要目

（時代順序）。凡、時代の順序を正さんには、古文より今文に推しうつるを以て、正當とす。然れども、今讀者の力をはかりて、之を課せんとすれば、勢近世の文より古代の文に遡らざるを得ず、故に、便宜の爲に近代の文を、かりに第一期と定め、第二期を、平安、奈良の兩朝と定め、支那のは、その上に、第三期として、秦以上の文を配當し置くべし。また唐以上は、第二期の中にあり。唐以下は第一期の中にありと知るべし。

この區別は、至りて簡略なることにて、之を以て各時代の沿革を知るべからざるは當然なれども、こは、その時代時代に從ひて、つぎつぎに之を詳説する所あるべし。

（文體）。文章には、もと諸體の區別あり。時代の下るに從ひて、愈その數を增し來れり。今左にその大略を擧ぐべし。

一、辭命。こは上より下に示さるゝものなり。その中に、

諭告。詔。璽書。批答。冊。(符命)制。
誥。勅。

又は、

謨。訓。誓。命。教。令宣。

等の諸體あり。

二、議論。こは、己が意志を陳べ、事の是非を判ずるものなり。その中に、

諫。奏疏。議。表。策。彈文。檄。書。戒。論。辯。說。解。原。證。問對。題跋。

等の諸體あり。

三、敍事。こは、事實を述ぶるものなり。その中に、

序。題辭。記。傳。行狀。謚議。碑。墓碑。墓碣。墓表。墓誌。誄。哀辭。祭文。

などの諸體あり。

四、詩賦。こは諷詠するものにて、我が國の歌詞の如く、皆韻躰なり。その中に、

詩。頌。賦。(騷。辭。文。)箴。銘。贊。

などの諸體あり。尙、詩には、古詩、律、排律、絕句、雜體詩、聯句等の數種あり。

五、雜著。こは、漫筆、雜錄、叢記等の如く、定まりたる格なく、隨意にかき去るすものをいふ。

(文法)。文法には、起結、布置、篇法、章句字法等の諸法あれども、後人の構成に出づるもの多けれど、余は、別に之を論述せんとす。故に之を擧げず。

(大體主旨)。すべて、讀みものは、先その大體の主旨を了解するを肝要とす。その精神主意の如何

なるかを知らずして、いたづらに、その文字の妙を玩ふとも何の益もあらざるべし。讀書は、もとより、才徳を磨き、品性を養ひ、人倫の道の大義を究めんが爲なれど、この本旨を忘るべからず。

略目

第一期。明治現代、德川時代、支那現代、宋元明時代、

第二期。平安朝、奈良朝時代。支那漢六魏六朝唐時代。

第三期。支那唐虞三代、秦時代。

第一期　(一)

一、皇靈鎭祭詔

今上天皇

朕恭惟、大祖創レ業、崇二敬神明一、愛二撫蒼生一、祭政一致、所二由來一遠矣。」（第一節）

謹みて案ずるに、この御詔の如きは、前に述べたる辭命中の詔の格にあたれるものなり。朕とは、われといふことにて、天皇陛下御躬らをさして宣ひたるものなり。恭しく惟みるとは、陛下が御祖先の御事を、つゝしみて考へさせ給ふなり。惟は、思惟することにて、思ひみるをいふ。大祖とは、神武天皇の御上をさして宣はせたるなり。神武天皇の日向より大和に入らせ給ひ、諸賊を平げ、人民を安んじ、都を橿原に奠めて、御即位の禮を行はせ給ひ、天が下の君とならせ給ふを創業と宣らせ給ふなり。業を創むとは、天皇の天下を治め給ふべき御業務をはじめ給ふをいふ。皇

業は、既に、國初の神々より御傳へあそばされしものにて、神武天皇に始まりたるにはあらねど、天皇の東征の時の御詔にある如く、天業を恢弘んとして、終に、その大本を基し給ひしかど、こゝには、業を創め給ひしときと宣ひたるなるべし。

神明を崇敬しとは、天神、天祖を崇敬し給ひしことにて、天皇の常に、天神、天祖の御徳業を紹述し給ひ、天壌無窮の皇運を繼承して、益、天業を恢弘し給ひ、以て天神天祖に追孝し給へることを宣ひたるなり、天皇の元年御即位の時に、八神を祭り給ひ、又は（八神の解は下に出すべし）四年二月詔して、我が皇祖の靈、天より降鑒して、朕が躬を光助し給ふ、宜しく天神を郊祀して、用て大孝を申ぶべしとのたまひ、靈畤を大和の鳥見山に立て、皇祖天神を祭祀し給ひたるなどにて、その御孝志の程をうかゞひ奉るべし。

蒼生を愛撫し給ふとは、蒼生とは青人草とよみて、人民のことをいふなり、この文字は、古く支那の書經などに見えたれども、我が國にては日本書紀に始めて見ゆ、さて天皇御仁心深くまして、はじめ日向にましし時より、御心を國家民人の上にそゝがせ給ひて、不良の徒の良民をしひたげそこなふことを憐ませ給ひ、遂に東征して、天業を弘め人政を施して萬民を安んじ給へる故にかく宣らせ給へるなり。

天皇既にかくの如く、天祖を敬し、民生を愛し給ひしも、要するに、天業を弘め給ふ外に出でざれば、皆御孝徳の深遠をうかゞひ奉るべし、而して、

その天祖を敬祭し給へるも、人民を愛撫し給へるも、皆、御政の外にあらずして、その基く所は、御孝志の中より出づるものなれば、政は、祭、祭は政、その本決して二つにあらず故に、祭政一致と宣らせ給へるなり、我が國の他の國々と異なる所は全くこゝにあり。

由りて來る所遠きありとは、かくの如く、二千五百余年以前にも猶かく嚴重なる御事なれば、その由來は實に遠く久しき事なりとのらせ給へるなり。矣の字は助字とて語勢を強くし、而して文意を助けて、その場合の重きを知らしめん爲の字なれば、事のしかと定りたる所にれもに用ゐるなり。この處にてよくその用法をもさとるべし。（つゞく）



漫錄

國字孝經（三）

あゝ、まゝ、

先王の孝の道をもて、天下しらせ給へりしも、年老いれとろへたると、はた、いわけなきとがたよりなくて、いみじうあはれなるを、ことに〳〵いとほしがり給ひて、もらさではぐゝませ給ひにたりしかば、御めぐみのあまねかるを、いみじうられしと思ふからに、大方の人々も、なりはひをさへをこたら

ねど、父母やしなふにも、ほど〱に合せて、家の内にぎはしう、遠つ親のなきあとも思ふやうに、いつかしらしなして、世になき人の心もなぐさみ、目にみえぬ鬼神も、めで感じためりしかどなん。天變など、まが〱しうなげき變へぬべきよろづのさはりなくて、一天下の人、いさましうたのしげなりしを、孝の道もて治め給へりしとはいへりしぞかし。さては、古代のみかどの、御德とても、孝の道をはなれて、外にまさりぬべきすぢは侍らぬにか、いかでかは此世界のはかりもなうひろかる、いきとしいける物のおほかるなかに、人ぞかりたふときはあらず。又人の身の行には、孝の道より大なるはなし、上なききはにも、猶それが上とおぼし給ふなる。御父母をぞ、おほぞらのやうに、かしこくおもほし、あふぎ給へれど、下なる人々、其の御德をありがたき事に思ひ、なべておのれより上なるには、かしこまりぬべき事と知りてなん。人々の行ひたゞしく、じねんにわたらひの道も、やすうなりもてゆきて、孝養のたすけ足らひたるにつけては、上の御めぐみの心にしみて、うれしうかたじけなさのいはん方なさに、みつぎのものをこたらず奉りて、いみじうよろこび申すなる、かう數々によろこびぬるも、みな孝の道の一つよりなんおこれるは、いかでかゝるたふとき道をはなれて、外〱にやはもとめつべき、父母のめぐみはたとへん方なく、懐に抱れ、膝の下にはひまつはるゝより、あるはすかし、あるはいましめつゝ、はぐゝみおほしたてぬるわざの、わりなうくるしき事も、かず〱さしまじりぬれど、これにまされる大恩は、世にたぐひあるべくもあらず。其のいとほしみのいみじきを、心に思ひはなるゝ折な

く、さりとて、あまねたらんことなく、やしなひの道いつくしうて、かしこまりの心をさへ、思ひ忘るまじくとなん、いにしへよりをしへ給ふなる、されば御政も同じ事にて、いちはやくおはしまさても、をかしそむくものゝあらぬも、もとは、やがて猶此の孝の道になんありける。

すべて人に敎ふるに、親と主とをたふとみうやまふよりかしこきはあらじ。さらんには、いさゝかもよろづの行ひにみだれたがふふしはなからんかし。親子の間のしたしういとほしと思ふ心は、さときもにぶきも、生れながらに思ひ知りて、宮づかへの道、はたね心得ぬ物やはある。父母にさしならべては、親をも身をも養ふべき物賜はりて、たのみ所にすなる、かしこき御かげの主君こそあれ、此の二つぞかり世になくたふときはあらず。

さるをねせ心から、よしと思へる人をぞ、親よりもげにいとほしう思ひなして、ゐやゝかにもてなしおへしろふなるは、なまわろなるものゝしわざにて、心あらん人は、さこそはせざりしか。抑親の子をおほしたてぬるに、幼より物習はせ、やう／＼ねびとゝのひ、おとなしうなりゆきぬるをも、猶いつ迄もをさなきものゝやうに思ひ、さおのはぞも、いかでなみ／＼ならじと、朝夕に心つかふなるかたじけなさは、いであはれいくそばくぞや、さるを、物の心なま／＼に知りそめつれぞ、中／＼にいめしめらるるを、いたううるさげなることに思ひて、かしこまりを忘れ、いとはしみにあまへて、やう／＼なめげにさへなりもてゆくは、大なる罪のさり所あらじかしや。かうやうのともがらは、たゞ自にさとしれひたちて、物をも習ひしり、よろづの禮節をもれば

ねたらんやうに思ひはこりをりて、其のひが心なる人よりも、今一きは愚なる人の、いみじきはかせのやうに、こと〴〵しうはめのゝしるを、したり顔にわれたけく思ひたるは、いかにそやある、見ぐるしうも、かたはらいたうも、さらにいふべき方なしや。されど、さる中に、もとの心、まことの道にたかへるぞと、心の至らざるもありぬめり。心ありなん人は、かへる〴〵も、身の行ひ正しうしなん。行ひ正しけれど、よしあし自ら知られて、孝の道にたがひなきを、おのれより劣れるものもまねびならびて、是をこそは、まことにかしこまりて、仰ぎ尊みぬべけれ。

（未完）

人妻六徳諺解

編者云、この一篇は赤堀又次郎ぬしの寄贈せられしものにて、原本はいと古き寫本なり。忠國公述作とあり。松平忠國公なるべし。奥書に、「干時享保十七壬子夏、朋道謹寫、此一冊者古人之格言ヲヒロヒ言葉ニツヾリ、公ノ奥女ニ進ジ給ヘル書也、凡人妻ノ日用可行專要也、連跡子誌」とあり、連跡子とは誰人とも知らねど、おもふに南都の人か、とまれかくまれ、今よりは二百幾十年の昔のものにて、いとめでたきものなりかし。

是は、人の妻たるものには、此の六つの徳をそなふべきよし、いにしへの人しるしおき給ひしを、ひらこと葉にてつゞり、老父がかたみにれくり侍るや。

柔順（やはらかにしたがふ）

柔とは心をやはらかに持事なり。順とは何事も夫

にしたがふ事なり。こゝろやはらかなれは、いかりはらだつことなし。そのうへ夫にしたがふ道をよく〳〵心えては、常に心たのしみて、きげんあしき事なきゆゑに、めしつかふものも、おのづから奉公もしやすく、家内おだやかなり。心やはらかなれは、あやまりてあしき事ありても、人もゐけんしやすし。よく人の異見をもちゆれど、しだいによき人になるべきなり。心はしたなく、たんきにて、われをあしきといふ人あれど、そのまゝはらだちいかり、むねふさはりて、ものゝ道理も耳にいらず。その人をにくみ、おそろしきかほつきしてにらみ、はやくちにのゝしり、人の事をいはんより、まづそなたのあしき事をなほせ、人の事かまふてもらはじなど、あらゆるにくていをいひ、猶はらをすゑかねては、戸障子あらけなくあけたて、手道具手あらくなげやりなどして、いかにもはらのたつけしき、さきの人にあたるやうに、わざともはたらくゆゑ、さきの人こりはてゝ、かさねてそのこゝろえするゆゑに、わが身のあしき事をしる事なく、しだいにあしきものになりはつるなり。夫しうとめとても、かやうの事たびかさなりては、ゐけんしても用にたゝぬのみならず、かへりてさわがしく、見ぐるしさに、大かたはさておき、はてはおひこめか、おひ出しかするより外はなし。是心のやはらかならぬゆゑなり。しかれど、わがあしき事をしらする人あらば、よろこびてあらため、よきにしたがふべきは人に劣るべからず。わきて夫にしたがふと云は、あしき事にても、をつとにさからはぬを妻の道といふなり。されども夫のあやまち身をうしなひ、家をほろぼす

べきにいたるべき事あらむ、いかにもやはらかに道理をつくして、より〳〵いさむべし。つね〳〵わが身柔順にて、夫にしたしまるれば、かならず夫もその異見をうけいれて、あやまちをあらたむるゆゑ、家もまつたく、子孫も繁昌するなり。わが身常に柔順ならず、夫にうとまれぬれば、夫のあしきことを口りかうにいさむる事、道理をつくすとも、いかでかうけひかん。つひに身をほろぼし家をうしなふにいたるとも、せんかたなかるべし。是人の妻たるものは、柔順の徳その身をよくするのみならず。子孫繁昌のもとゐなれば、あけくれこゝろにかけて、此道にそむくべからざるなり。

清潔

とは、心のきよくいさぎよき事なり。心の清きとは、慾心のなき事なり。うゑたる時食をおもひ、さむきとき衣をおもふは、慾心とはいひがたし。食物にいろ〳〵のこのみをいたし、あくまでむさぼり、はては人にかくしてのみくひ、あるひは、わたくしにくひものをこしらへ、きるものによのつねならぬえやうをこのみ、有がうへにもつみかさねまほしきを慾心とはいふなり。是心のきよからずいさぎよからぬなり。いさぎよきといふも、水のにごりなく、見えすくやうなるをいふなり。男子とてもかはることはなけれども、ことに女はけがらはしく、いたづらなる心ゆめ〳〵持べからず。けがらはしき心なきときは、もとより人にかくすことはなけれども、なほも人のうたがはん事をおもひはかりて、一筆かくことも、人にかくして書くべからず。双紙反古のたぐひにても、人にかく

して、見るべからず。人にかくすは、みなよからぬ事なれどなり。さて又しわくきたなきも、けがれにごりたる心なれども、人にやるまじきものをやるは、なほ〳〵けがれたる心なり。此の人に此の物をあたふるは、いかなる下心にてあたふるぞと、われとわがこゝろをかへり見るべし。かならずけがれにごりたる慾心なる事をしらど、すみやかに、心をあらためて、いさぎよくすべし。あたふべきものをあたへぬは、もとよりいさぎよからぬ事なり。さて又心のいさぎよきうへにては、身をいさぎよくもつ事、妻たるものゝたしなみなり。身のいさぎよきとは、すべて手あし身もちきるゐまで、しだらくならぬやうにする事なり。是皆我が夫にいぶせくおもはれぬため、しうとしうとめ、又は夫の先祖の鬼神へつかふるためなり。しかるにこゝろはいたづらに、けがらはしきものから、髮かたちをつくろひ、にほひをとめ、衣類のかざりをなすは、是他人の心をとめん事をねがふなり。いかほどかたちはみやびやかなりとも、その心根のきたなき事、まことにちくるゐにもおとりたる事なり。されどその身のけがらはしきのみにあらず、世のことはざにも、一家一門の顔をよごすとは是をいふなり。これによりて、まづ心を清く潔くもちて、そのうへに身をきれいにもつべし。身のつくろひにかゝるゝは、こゝろのきたなきほど、うち見るよりはかりしらる。あさましき事なり。

（未完）

烈女（その五）

橘の家　主人

都　烏玉

うば玉の黒髪ぬれてあは雪の
　ふりてや來ます間なくこふれど

烏玉は、都七條のものにて、ある侍のもとに嫁ぎけるが、そのあした、君の命によりて、夫は遠き國へ使せむとするに、名殘惜しけれどとゞむべきにもあらず、別れてはつゆ忘るゝひまもなく、平かに歸り來む日を待ちてありけり。年を重ぬれど絶えて音づれもなきに、戀しさいよ〳〵募りて、遂に病の床に打伏し、三度のものにむかふも物うくて、姿いたく衰へ、ありしさまにもあらずなりけり。六年ばかり經て、夫は君命をはづかしめず歸り來て、この有さまを見、いたく驚き打歎きつゝ、「かくのみにありけるものを猪名川のおきをふかめてあがおもひける」とよみければ、枕をあげてかへしよみけるなりとぞ。

今按ふに、この歌誤字あるべくや。今はえどらくもとのまゝにさしおきぬ。千代の契をむすびし朝、既く白雲の客となる、其情はたしていかに。さても想夫の戀情やみ難く、遂に病魔のために起たず。いふなかれ、夫の在らぬ間は、一厨心をするどくして、家事にあたり、内政を治むべきを、何たる女々しき至りぞと、あゝ僅かに一夜の契約は、六年の離散となり、しかも平安なるか、否かをも知るを得ぬ、いかで歎かざらむ、いかで戀ひざらむ。歎と戀と重なりて、起つことを得ざる、これ夫を思ふ至情にあらずや。今はかゝる女よもあらじ。はづかに北海道に旅する人をきらひて、父母は女

をとりかへし、女も亦喜びて命に從ふものさへありきとぞ。起たざる貞か、歸る操か、よも識者をまたずして明かならむ。われは、一度かためたる詞は、確く用ゐて動かざる烏玉その人を多とせずんはあらず、歌の功拙今は問ふを用ゐず。かの筑摩鍋二つ三つ重ぬらむ人には、いふを憚るところなるべきか。

檜垣嫗

年ふれどわが黒髮もしら川の
　　みづはくむまで老にけるかな

檜垣嫗は、檜垣の御とて、もと肥後國の遊女なりしが、とし老いて、つくしの白川といふところに、かすかにすみけり。其比のことなりけむ、大貳藤原興範朝臣ものへゆく道に、柴の戸打たゝきて、水たうべんと乞ひけるに、嫗は若き折のことなどれもひまはしつゝ、つゝましさとかなしさとに堪へず、水をもちいでゝやがてよみけるなり。この歌傳はりて、後撰集にのせられけり、いとはまれある事なりとぞ。今按ふに、水になく蛙、花にうたふ鶯、みな自らなる歌なり。いやしくも萬物の靈長と生れたる人の心をうたひ出せる歌、まして言靈の幸はふ國に生れ、神代ながらの言の葉もて、いつはり飾らぬ心緒を述ぶ、いかで天地をりかさゞるべき。身既に遊女なりといふ、其行傳はらざれど知るによしなく、はた昔の遊女は今の如きものにあらねど、好みてさるものとなりつるにはあらじ。きはめて家貧しくして、巳むことを得ざる事情にせまられしによりてならむ。いにしへは一首の戀歌をよみしために、その身を犧牲として、其歌たゞ實際ならしめ、今もなほ人口に膾炙するものあり。一家の

浮沈にのぞみ、歌稿を携へて武装のまゝ、勅撰の集にのせられむことを師に乞ひしもあり。みな斯道を重みして、れこりし結果なり。嫗は、玉しきの都路遠き鄙に生れ、しかも身遊女のいやしき際にあり、美貌のために一時はときめきけむも、年老いて今や殆世にすてられながら、これたびは歌をもて、位高き大貳を驚かし、遂に勅撰の集の上に今も傳へられてもてはやさるゝもの、それ何によりてにかかわらむ、歌そのものゝ尊きによりてにはあらじか。今や口に洋語を囀り、漢語をつかひ、自ら文明の兒と稱へ、みだりに開化がりて、意氣揚れるもの、そもそもはづる處なきか。甚しきは、韻脚をふまず、三十一文字の短文字、以て歌と稱するに足らず、よろしく排斥すべきものなりとはこちへるもの、彼蛙にも鶯にも劣りたらむものぞ。

歌の尊きことははやくいへり、まして、優美纖巧なる女子そのものゝ口より出づれぞ、いかによろこばしく好ましからむ。身の貴き面の美しき、到底その世に限れり。あはれ、心の美、その萬代不易を知らざるか、そを言葉にあらはせる歌、はた然るを知らざるか。

れきの玉藻（續）

永石德文

中江藤樹年譜

中江藤樹といへる人は、聞えたる儒者にして、空論をさけて、實踐躬行をたふとひ、德たかゝりし人なり。この年譜、蜀山人のものせし南畝叢書中に見えたり。先年成れる藤樹全書といふものにも、年譜は見えたれども、そは漢文にして、且ぶける

處も、委しきところもありて、これとは同じからず。今こゝには太田南畝の序文をも添へて、とり出でつ。

藤樹年譜一卷、蓋門人所錄、而闕其名、覃獲諸友人山田君忠所、按懶齋藤井氏孝子傳曰、中江氏、姓藤、諱原、字惟命、江州高島郡小川人也、自少讀書、頗有所發明、其學宗王伯安、凡本朝諸州之王學、惟命倡之、有母事之而孝、嘗仕加藤某侯于豫州大洲城、欲迎母以就養、母曰吾聞婦人不越疆矣、願守之也、惟命不逆、即請還職以歸田里、主宰惜其才不敢許可、惟命勃然曰、我雖不孝、豈一日能忍爲祿所縻、以曠定省哉、乃爲一書具述其不容與母索居之意。留之潜遯、遂歸隱于小川、以獲母悅、時年二十又八、寛永某年月也、事詳譜中、而以爲二十七歲時事、當以譜爲正、藤樹寓居于京師一條葭屋町、其址尚存、嘗自江州乘轎至京、道語轎夫以性善良知良能事、轎夫感悟至垂淚、其實德感物如此、世人目曰近江聖人、譜逸其事、故附于此、江戶大田覃識、

藤樹先生年譜

撰人闕

先生諱は原、字は惟命、姓は中江氏、假名は與右衛門、江西高島郡小川村の人なり。考諱は某、字吉次、同郡北川氏の女を娶て、先生を藤樹下に生ず。先生少より出て、豫州に仕へ、後致仕して、藤樹の下に學を講ず。門人從て藤樹先生と稱す。

慶長十有三年、戊申三月七日、先生生る。

元和元年乙卯、先生八歲、在小川、

先生僻壤に生長すといへども、野鄙に染む事なし。

たま〱鄰家の兒童と馴れあそぶといへども、每に靜にして、かれに相移る事なし。

二年丙辰、先生九歲、在二伯耆一。是年、祖父吉長公に養はる。此春祖父小川村に來りて、先生を養はん事を欲す。父母其一男なるを以て、不レ肯。祖父固くこれを强ふ、故に不レ已レ得して遠く伯州に遣す。先生性穎敏豪邁にして、幼より物に愛着せず。故に父母を離れて、遠く行くといへども、一毫も哀む事なく、能く祖父母に孝あり。今年始めて文字を習ひ、書す。期年にして殆能す。祖父もと文字に拙なし。每に自らこれを愧ゆ。故に先生をして、つとめて文字を學ばしむ。遠近の書翰皆先生をして書せしむ。人皆其幼にして文字を能する事を嘆歎す。

三年丁己、先生十歲、在二豫州一。今年、伯州の大守、左近公、豫州大洲に轉任せらる。故に先生祖父に從て、大洲に往く、冬吉長公、風早郡の宰となる。先生從て風早郡に往く。祖父先生の爲に師を求めて、ます〱文字を勵み習はしむ。字を學ふの間に於て、庭訓式目等を學ぶ。先生記得する事甚速にして、一字として、忘るゝ事なし。祖父悅て以爲らく、如斯は壯年の人といへども、及ふべからずと。常に人に逢ふごとに、其敏なる事を稱歎す。先生ひそかにおもへらく、吾これのみに止るべからずと。

五年巳未、先生十二歲。一日、食する時、つら〱おもへらく此食はこれ誰が恩ぞや一には父母の恩、二には祖父の恩、三には君の恩、自レ今後誓て常に此恩を思ふて忘るべからずと。

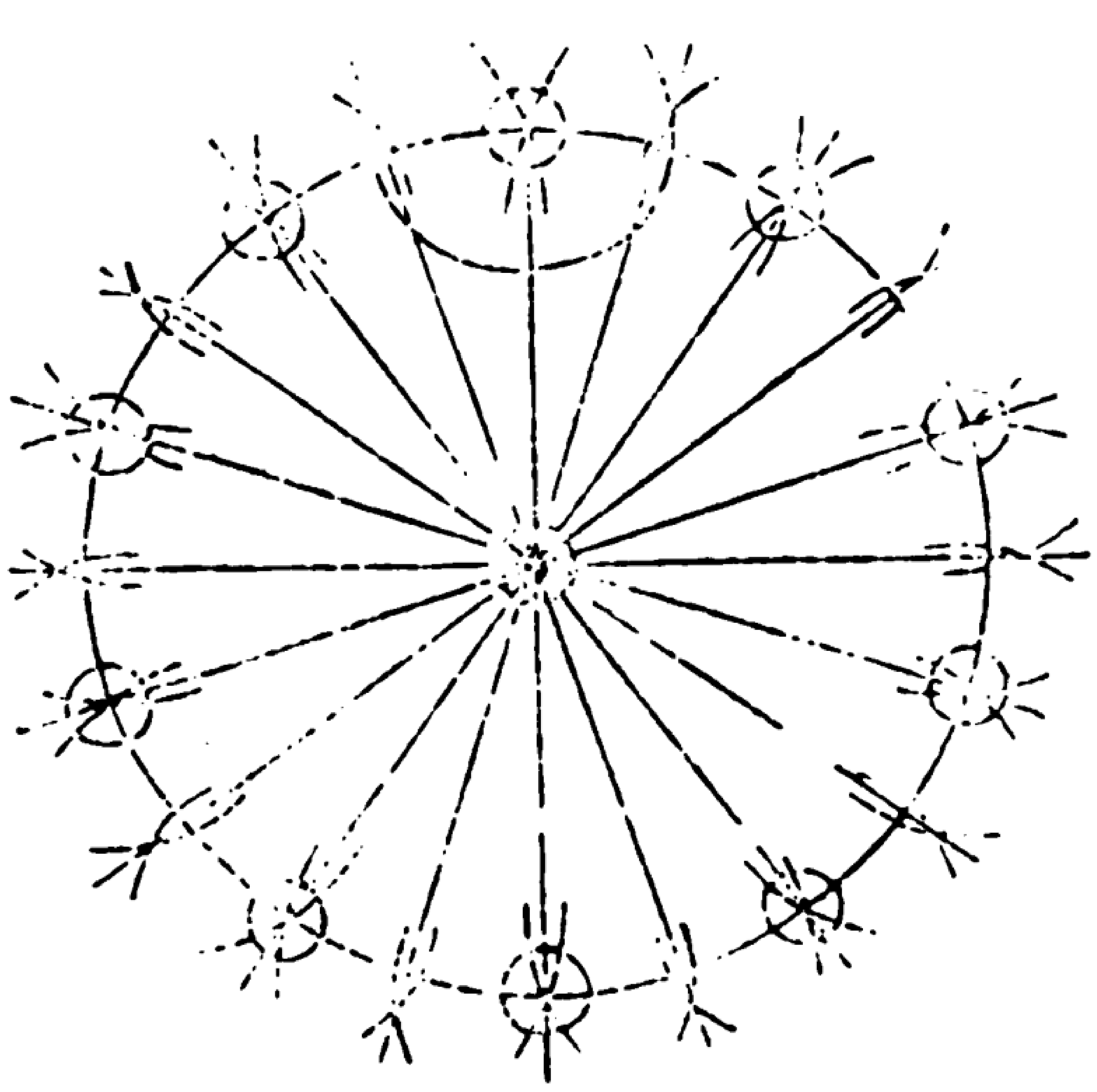
六年、庚申、先生十三歳。
此年、夏、大に雨降り、五穀不レ實。百姓饑餓に及むんとす、これに因て、風早の民、去りて他に行かんと欲する者衆し。吉長公之を聞て、かたく之をとゞむ。郡に牢人あり。其名を須卜といふ。この者、くる玄まといふ大賊の徒黨にして、形を潜め、久しくこゝに住居。今の時に及て、先退んとす彼已に他に行けは、百姓も亦従て逃んとする者多し。これに因て、吉長公、僕三人を遣はして、これを止む。僕等歸る事遲し。吉長公怪て自ら行きて、かれを止め、且法を破る事を罵る。須卜いつはり謝して、吉長公に近づく。其樣体常ならず。是に因て、吉長公馬より下りんとす。須卜刀を抜き走りかゝり吉長公の笠を撃。吉長公の僕之を見て、後より須卜を切る。須卜疵を蒙るといへ共勇猛强力の者なれど、事ともせず。後を顧みて、僕を逐ふ。この間に吉長公鎗を執てむかふ。須卜亦回り向ふ。吉長公須卜が腹を突透す。須卜つかれながら、鎗をたぐり來て、吉長公の太刀の柄をとる、吉長公も亦自の柄をとらへて、互にくむ。須卜痛手なるに因て、倒て、乃死す。須卜が妻、吉長公の足をとらへて、倒さんとす。吉長公怒りて、又これをきる。已にして自ら其妻を殺せし事を悔ゆ。後須卜が子、其父母を殺せるを以て、はなはだ、これを恨み、常に怨を報はんとして玄ぞく〳〵吉長公の家に火箭を射入る。其意れもへらく、家やけむ、公然出ん。出む即ちこれを殺さんと、吉長公、其意を伺ひ知る、故に、ひそかに火箭の防をなす。然れども、其意乃盡く賊流等を入てあまねくこれを殺さんと欲す。故に却て、門戸を

は開しむ。すなはち先生に謂て曰、今天下平に して、軍旅の事なし。爾が功をなし、名を揚べき道なし、今幸に賊徒襲入らんとす。我賊徒を伐ば、爾彼か首をとれ。又家邊を巡て、賊徒の入をうかゝへ。先生こゝにおいて、毎夜ひとり家邊を巡る事三次にして不レ怠。時に九月下旬。須卜か子、數人をいさなひ夜半に襲入んとす。吉長公あらかじめ、これを知る。すなはち僕等に謂て曰く、今夜賊徒襲入らんとする事を聞。いよ〳〵門戸を開き、ことく〳〵く内に入らしめよ。我父子まさに彼を伐ん。汝等は門の傍にかくれて、鐵砲をもち、もし賊逃出なば、之をうて、必ず入る時にあたつて、是をうつことなかれと、夜半賊徒まさに入らんとす。僕あはてゝ先鐵砲をはなつ。賊驚て逃く、吉長公之を逐ふ事數町、遂に追及ぶことあたはすして返る。是に於て先生をして、刀を帶せしめ、共に賊を待つ、先生少しも恐るゝいろなく、賊來らば伐たんと欲する志面にあらはる。吉長公、先生の幼にして恐るゝ事なきを喜ぶ。冬祖父に從て風早郡より大洲に歸る。

（未完）

紋帳圖式綱目

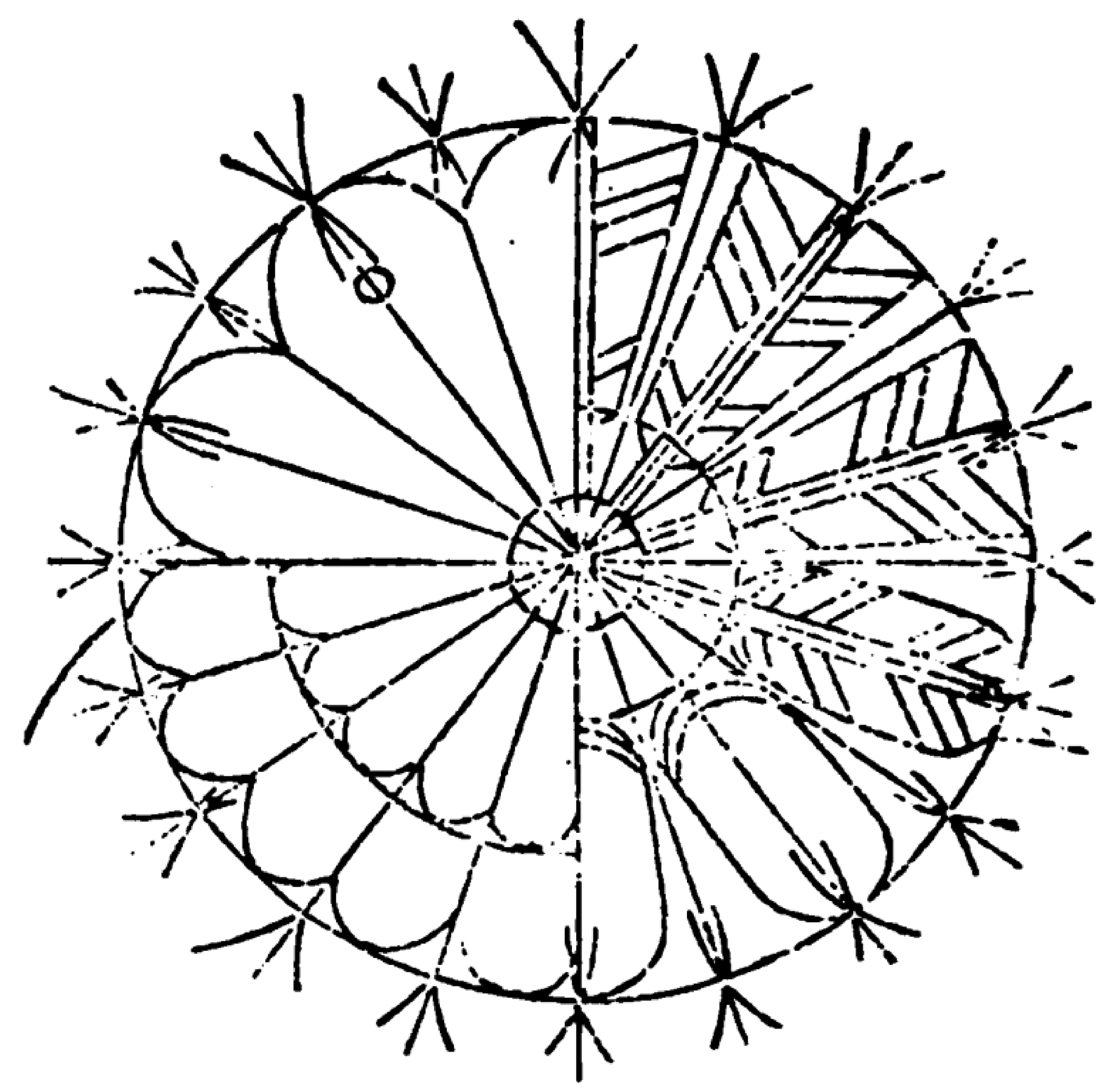
井上頼文寄贈



十物但
廿の割

十本矢車

十ゐふきく

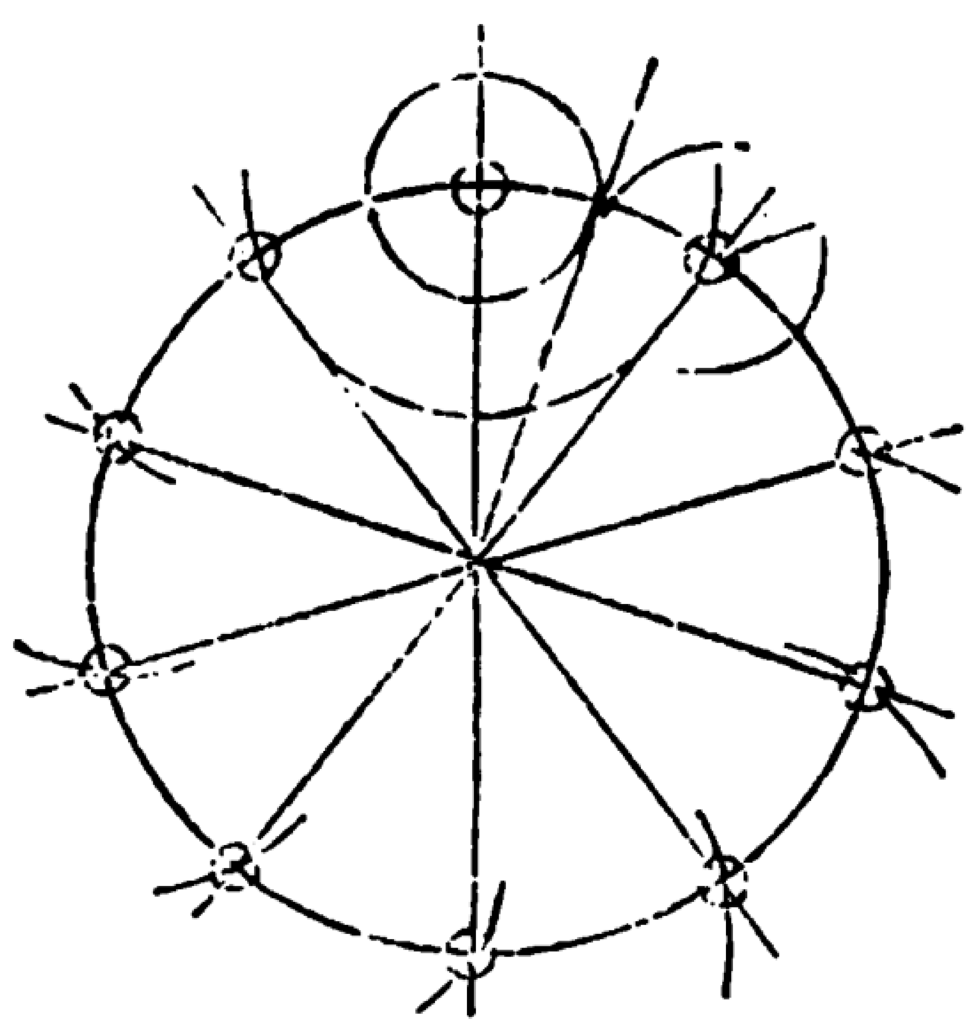


はぐるま

山吹

右の類は、此のわりを用ゆ。前にしるす五つ物（十割）に同じ其間々を兩方より割るなり。

但割方如此



世の中の

こも亦二百幾十年の昔のものなり。たゞふとかきれかれしが、今に殘れるにて、誰人の作とも知るべからず。文中○を符とせしは、紙いたく古びて、しみの餌となれるにて、何の文字とも志るべくもあらず、いと惜し。詞ひくかれども、よく女の上をいひつくして、くちをしきふしもなし。讀みもて味ひなむ、これはと思ふ節もあるべし。ふかくはいはじまづ讀みあぢはひてよかし。

世の中の。家に姫と。生れては。作法正敷。志とやかに。常に行儀を。嗜みて。物いふ聲も。和らかに。無情に口を。きかぬもの。たかき賤しき。隔てなく。物をよく縫ひ。ものを○○。綿の摘ひき。績みつむぎ。苧機の。分を。能くしりて。すべて女の。其所作の。も

の丶折形。むすひ〇〇。絲の組打ち。花むすび。羽織袴の。仕立やう。物の染めやう。心にかけて。習ひ置。大勢人を。つかふとも。ひとの分を。忘らざれぞ。いひつけするも。都合せず。扨又ものを。書事も。もの丶道理を。辨へて。用を叶へん。爲なれぞ。伊達早事を。さし止て。分〇〇ゆるを。專にかく。分けあしからぬ。双紙など。讀も一段忘はらしく。琴など彈じ。貝れはひ。けだかくみゆる。ものなれぞ。小歌道行。三味線や。折半双六。貿簇抔。遊女妾の。業としれ。歌など讀も。よけれぞも。伊勢物語。源氏など。わしく見なせむ。いつと〇〇。こ丶ろのそる丶。ものぞかし。先專一は。こ丶ろいれ。姦しからぬ。やうにして。親兄弟に。むつましく。召仕をぞ。いたはりて。努〳〵氣隨。すべからず。朝とく起て。髮假粧。人に見られぬ。その内に。仕まひて身持。すゞやかに。兎角奇麗に。身を持て。緣につきぬる。その時は。二度家にかへらじと。こ丶ろに推して。姑に。孝をつくして。あひだよく。夫を主と。こ丶ろ得て。たとへ寵愛せらるとも。少も奢る。こ丶ろなく。唯大切に。れもひ入り。公儀のことは。なに事も。夫にまかせ。いへのうち。治る事は。我が所作と。心にいれて。務むべし。たとへ夫は。面强とも。恨そむける。こ丶ろなく。またはふた道。あるとても。かならず嫉む。事なかれ。とかく我身を。もだされぞ。友にひかる丶。習ひにて。夫の氣ぞへ。なほるべし。位のたかき。姬達も。如

斯の。断りを。〇〇〇〇が。儘にせむ。縁には深き。れんあいの。縁つきはて丶。あいさつも。あしくならんは。目の前と。後にいかはと悔むとも。甲斐はあらじと。こ丶ろによ。子を持たらむ。一人に。身の慎を。せんにして。守り生長は。その子まで。能き生立と。成ものぞ。扨又もの丶。ならはしは。仕合よくて。榮るも。不圖衰る。事もあり。愛の所を。兼てより。よく心ゑて。大勢の。人をつかへる。奥方も。女の懸を。おこたらず。髪も自の。結ものぞ。こ丶ろ懸ある。その人は。變を常々。こ丶ろがけ。女なりとも。ことあらむ。ひけをとらじと。おもふこそ。誠の人の。道ぞかし。あしきそだちの。人を見て。我が鏡と。おもふべし。身持無沙汰に。

耻しらず。立振舞を。荒くして。悪氣の起る。事あるも。遠慮もなくて。れは欠。我が歎寄事の。見物や。獻言噺。わがま丶に。大口閉て。高笑ひ。朝は晝まで。大寢して。髪打さわぎ。見苦敷。ふりをしながら。男ざれ。みれむ様々。しよていして。適々人の。諫むれむ。泣しみつきて。顏わかめ。直すこ丶ろは。露もなく。少しの事も。腹をたて。短氣をみめと。思ふかや。唯喰ひ物に。尾籠付て。腹〇〇物は。機嫌よく。用ある人も。相手にし。〆りもあらぬ。ながはなし。心にあはぬ。事あれむ。咎なき。下女や侍兒に。顏をはらして。鋭り聲。仕事嫌ひの。遊び數寄。夫の留守の。せ丶り喰ひ。胸にれびして。立居には。太股までを。顯はして。肌を隠せ

る事もなく。また風流に。身を曜し。うたの双紙を。引亂し。烟管くはへて。肘まくら。私言噺し。見ぐるしや。子を持ちぬれど。物事も。子にかこ付けて。いよ〳〵に。氣隨のこゝろ。日々に増。終に夫に。見かぎられ。親の名までを。さげしませ。其飽心の。出來つゝ。大恥かきて。あげくには。身を失ふ。本となる。かゝる作法を。見るならで。余所の事とも。それもはずし。我が身の上に。ひき當て。朝夕心を。あらためて。うけ得たる。家の名を。穢さぬやうに。守りなで。子孫繁昌。富貴にて目出度人の。てはんなるや。

東京二十四景（十四）

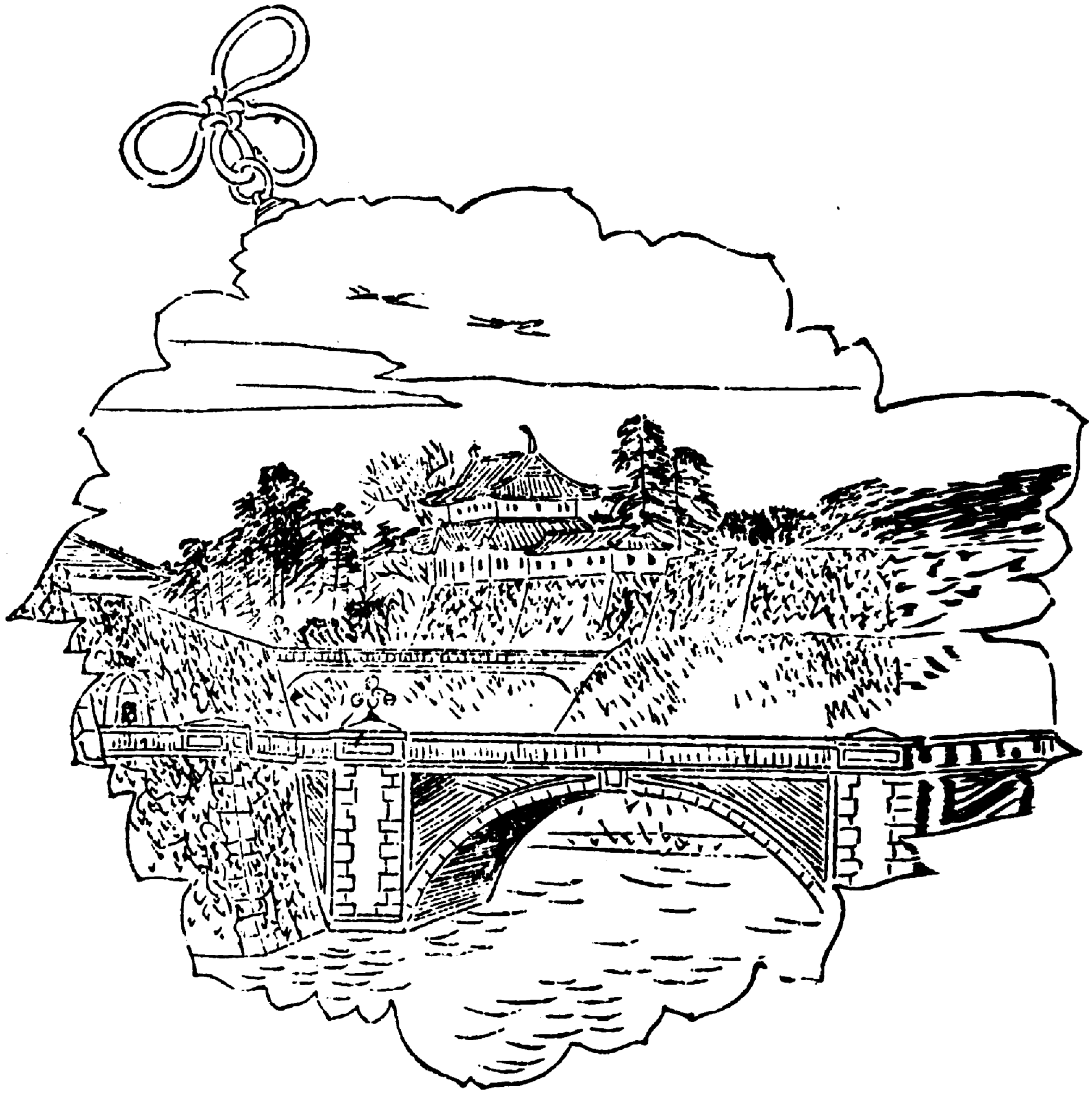
蓬生屋女史

二重橋

皇居の壯を見ずんぞ、何ぞ天子の尊きを知らんと、からの詩人のうたひしは、あらぬ外國のためし、神世より、天地と共にきはみなく、つがの木のいやつぎ〳〵に、皇統綿々たる我が國のみかどのたふとさは屋根もり壁くづれたるみあらかのなか〳〵に知られぬ。

グランド將軍、曾て日本に來りし時、赤坂の假皇居を見て、いたく歎きしも、うべや。今の皇居千代田城は、ほとんど東京の中央にあり。御濠、水碧にして、浮世の塵を遮り、宮樹森蒼として、紫雲常に屯す。城壁なほもとのまゝにして、やぐらの殘れるもむかしゆかしきに、みあらかの、國ぶりのつくりなる。いとめでたし。正門のながめ、ことに壯麗なり。こゝを二重橋ととなへまつるは、橋二つ重なれぞな

り。御溝の水深く且つ碧にして、藍を流し、鏡を開くが如くにして、幾んど丁字形をなす處、第一橋を左にわたりて橋門を入り、更にまた右に第二橋をわたりて正門に達す、六龍朝に橋もとゞろにふすならすは、みかどのいでたゝせ玉へるなり。千騎夕に橋上に雷を起すは、みかどの歸らせ給へるなり。三爪にわかれたる水のひとつは、左に櫻田門の方にゆきひとつは坂下門のかたにゆき、ひとつはまた、二橋の下を過ぎて城内ふかく流れ行く、石白く、水青く、いとたくゆかし。夜に入れば、橋上の電燈一時にかがやきて水に映じ、空を射て、上下焜燿水波金を碎く、橋外は大道砥の如く、外廓に至るの間には、芝生つらなりて、塵埃浮ばず、まことにめでたきながめにして、記しまつるもかしこうこそ。



朴平（十二）

白魚女史

ふびんでは無いか、見るたびに、ちよんまげの頭の霜は白くなりまさるよ。君、文雄君、あまりにあの老翁を泣かせ給ふな、心安ら終生させてやり給へと、例は快活なる春野も、流石沈みたるけしきにていへど、文雄も言葉なく、しどしかきくもる思ひ、誠よ彼は父の代より心一つにかしづきたる忠僕、もはやいたく年も老いたれど、よき程に身をも心をも安ませやりたしと、我も思はぬにはあらねど、老いてはとかく世話のやきたきものと見えて、用らぬ事をまで思ひたどりて、自らなげかでもよき事を思ひなげき、こぼさでもよき涙をこぼして泣くやうなることをするには困るよなど話しあひつゝ、しづかに隅田づゝみをつたふ春野と文雄の二人づれ。夕ざれど流石小春も川風の身にしむる事よと、春野は幾度か嚔めして、風の神に見こまれたと見ゆる、何にもせよ、はやう百藥の長をふくせずど、文雄君いそぎ給へ、いそぎて植半まで、植半といへど、小川は今頃彼の世にて何をして居るならむ。數ふれどもはや來年は七回期、今までも世にあらど、僕たちよりは、きつと立ち勝りてあらんを、あたら才子をかへらぬ浪になしはてしくやしさ。彼の折り、ひき上げて、植半に醫者をよびつるは、まだ、さまで時たちしといふにはなかりしを、よく〳〵はかなき天命にてはありけるよと、そゞろなき友を思ふ懐舊の情たへがたげにて、春野は、行きもやらず、たゞずみてながむれど、渺々たる綠波の行方を知らにたゞよふのみなるに、

ありし世を思ひいづれど隅田川

波はむかしにたち帰りつゝ
浦山しくも帰る浪かな、昔男にはあらねども、と、さ

びしげにはゝるめた文雄ゐ共に語りゐ遊びゐしたる友のこと、つくづくとうちながめて、これも、玄ぞし、もの云はぬ心によせかへて無量の感慨。あなはかなき事を思ひ出でゝ、あたら吉日に、涙をそこぼせしよ。しかし小川はおもしろき男なりき。水に危き持病をもてれど、およぎなどはやめ給へとて、僕も忠告せし事は幾度か。彼の折りも短艇より飛び下りんとすれど、今日のみはとて袖をひかへてとゞめしを、何の、かゝる浅流、おぼるゝものかは、水をこそおぼらしてくれん、たとへおぼるゝとも、水で死なんは本望とて、袂をふりきり、ふり拂ひて、一おどり身をおどらして、入るよと見ゑしが、いつまでも浮び上るけしきなし。あまりに長しとて、ボートこぎよせしに、あはや、彼は其の病のさしおこりてか、苦しげに泡ふきあげて、もだへ居りてと、聲ひせだせしが、今頃は定めし彼の世にて、泳ぎてもあらんか。あはれや。あはれのこととしてやと、またうちしほれたるが、かへらぬ事、かへらぬ事、せんなきこと、いはじ、いはまじ。それも若氣の血氣の過失、我等へのよき教へ。文雄君、血氣は危し。彼れの殘したる先轍に考へて、血氣にはやるは止めんことよ。命あらざ、またいつか大事業もといふべきことならずや。のう文雄君、互みに玉の緒は大切にして、惜しむべきことにころ。早うゆきて、玉の緒水くみかはさん、いざ早う、かけ足、一二三と聲かけてかけ出すに、小供らしい、よし給へ、土手の草木が笑ふぞとて、文雄はもとの落ちつきたるあゆみ、春野は五六間駈けぬけて立ち留りたるが、文雄

の容易く追ひ伴れぬに、もどかしげにて、また一二間ゆきかへりて、伴れ立ちて、やがて白髭の森をもすぎ、鐘淵をもあとにし、梅若近くにかゝる頃、日ははや西にかたぶきて、夕霧ふかく、川原をつゝみて、おぼつかなき水鳥の聲、をちこちにきこゆる。やがて植半につき、酒肴とりて二人さしかざせど、何となうむかしを思ひ出し、名殘りあやなし。見亘せど川霧いよ〳〵深く、此方の軒どをもうちまとひ來て、酒も心もうきたゝぬやう思はるゝに、春野は強ひて興せんとて、君が代は千代に八千代にと、小供の句調にうたひつゝ、千代、千代、千代と云へど思ひ出る可憐の娘、かゝる折にころ呼びて、身の上話きかんこそ一興とて、傍の下女に、小千代を呼べとそつと云へど、彼方は早うきゝとりて、急ぎ立ちたり。

小千代と聞きて、少しにがき顔なせしが、しかし彼れは、げい子に似ぬ心ある事を云ひしよと文雄のもらすに、春野は時を得貌、世が世、時が時ならぞ、彼れは奥ゆかしき深窓の中に、容易くかいまむべくもあらぬきはの、花よ玉よなるものをと人のうはさ今日こそは、親の名を、あかさせてやらうなどと、春野ひとりくみをる中に、やがてつれられ來たりける小千代、今宵はありがたく召させ玉ひてと、いふも半は口の中にて、しとやかにゑしやくする袖もやさしく、しはらしく、文雄の居る故にや、何となうはづかしき色を顔にそめなしたり。よく直ぐに來て玉ひしぞ、うれしや、まづかけつけの引出物とはゝゑみて、春野がさしつくる盃、頂きて、そのまゝ下に置くに、かけつけは三盃ぞ、早う飲まずやとしひられて、いなむ事叶はず、そつと飲みはすがやうふる





まひて、近き杯洗の中に洗ひ捨てたるは、此の娘まだそれさへも飲み習はぬにや。いざ今一杯。小千代の子、今日はげいの替りに、身の上話、朝顔にもあるまじけれどきかせよと、春野のとひに、彼方は、うらはづかしき面を忍びて、身の上は藝子とぞかり、他の事も云はぬに、そちは誰の子ぞ、ゆかりある親のよし、うち出でよ、力ともなりてやらんと云へどそれもまた他處にまぎらして云はず、なほともすれぞともすがりて、しきりに輿風のきかんとするに、妾は木のまたより生れし子、親が何とて、かゝるいやしき藝子などに、うみつけ侍らんとて、面には笑みをつくろへど、内は何となう、むせぶ如くになり。折りから雁がねの聲の聞ゆるに、濁江にむせぞんよりは雁がねの翅ぞほしきと、やさしげにいひて、窓のべに立ちよりて、聲せる川づらの方を見わたすけしきもあはれなり。



文林

梅花先春　　徳大寺實則

あら玉のとしのはつ日に咲にほふ

雪中鶯　　佐々木高行

梅ははるにもかはらざりけり

ろらされて雪はふれども咲ろめし
梅のはつ枝にうぐひすのなく

雪中祝　鍋島直大
ゆたかなる年を祝ひてふるゆきを
見ながらにのむこれのうま酒

翠松　前田利嗣
朝夕にみれどわかれぬにはのまつ
いつも變らぬみどりなれども

鷄　高崎正風
久かたの天津そらよりわくる夜を
いかに知てかとりのなくらん

綠竹年久　竹屋光昭
新らしきとしを重ねてくれたけの
かはらぬ色もふりせざるらん

閑居　諏訪忠元

松風のおとをともにてくさの庵に
こゝろ安くもねくりぬるかな

待春　本居豐穎
雪ふみて梅もたつねようづみ火に
うもれてのみや春をまつべき

日出山　宮地嚴夫
山の端をいづる朝日にてらしても
おもしろかりし神代おもほゆ

新年待鶯　荻原嚴雄
年たてど待ものおはきかすにしも
まつうぐひすをかぞへつる哉

新年興　千葉胤明
年ほぎに人の來つとも去らざりき
かるたすくろく取はやしつゝ

酉のとしのはじめに　三浦千春

家毎に千世のはじめのさかづきを
とり〳〵祝ふとしたちにけり

冬夜長　藤井行麿

酒のため夕まどひしてねられねど
ながきをかこつ冬のよはかな

雪中竹　三輪義方

さよふかく去つるゝ雪の音すなり
まがきの竹やれきかへりけん

常磐女淸儀に從ふところ　草野隆道

呉竹の千代のみさをは見ねながら
わらぬかたにもなびきける哉

勝野千賀女　佐々豊水

霜雪にたへしかつ野のうめか香は
千代もたもとににほひぬる哉

としの始に　永石德文

あめつちとはにうごかぬ高御位
何によそへていはひますらむ

山影寫水　鍋島榮子

つもりたる雪もさながら玉くしげ
箱根のうみに移る富士のね

新年氷　柳原愛子

あらためて汲し筒井のこぼれみづ
こほれしまゝに氷けるかな

新年鑑　千種任子

新たまのとしの朝日にれはにはの
みいけの鑑もせをやはすらん

松有歡聲　園祥子

あしたづも今かまふらんれは庭に
萬代よぶふまつかせのこゑ

人送早梅　姉小路良子

冬ごもる人のためにとをりてけり
雪まにさけるうめのはつはな

新年鶴　　小池道子

新玉のとしたつそらにいづる日の
かげにむかひて鶴なきわたる

雪中鶯聲　　松平健子

うぐひすのなく山かげはふる雪も
さすがにけふは積らざりけり

氷　　日野西廣子

つぶてうつ里の子どもの聲すなり
門の小がはやこほりそめけん

寄國祝　　山本富士子

神代よりよゝにつたへて久かたの
あまつ日嗣をあふぐくにかな

竹霰　　鶴久子

うぐひすのすごもる庭の竹むらに
いたはりなくもふるあられ哉

若水　　海上壽子

いざゝらむわれもくまゝし若水の
その名におひて若かへるがに

冬日閑居　　鹽井ふく子

氷りはてし筧のみづのをとにだに
とはれぬ宿となりにけるかな

紫式部　　柴田靜榮子

さよふけて閨のと叩くくひなにも
あけぬこゝろの奥ぞゆかしき

年の始に　　師岡須賀子

新らしき年のはじめぞ晴れわたる
ことしもいかに長閑かるらむ

仝　　仝　人

新たまの年たつ今朝のほぎごとは
うれしきものゝ始なりけり

若水　内田遊歌子

年月のめぐりてはやきくるま井を
くみてぞ祝ふ今朝のわかみづ

新年鶏　安東菊子

聞そめて去年のねふりは覺にけり
ことしを告るにはとりのこゑ

金鵄勳章　藤井行麿

大君の、みことかしこみ、ことさやぐ、から國うちし、ものゝふの、ますらたけをは、功しも、たゞへましつゝ、いそのかみ、いはれの命、御とらしの、弓ずゑに立し、黄金いろの、とびのきはへる、めかゞやく、章たまへり、これぞ身の、代々に殘れる、かゞはしき、かた其の名のほまれ、子孫の、末遠ながく、かたりづき、いひ繼てこそ、あとをまとはめ。

さよ時雨　望井雨江

やよや忍ぶの　むら時雨、
さな音たてそ、亂れ來て。
ひとりぬる夜の　さよ枕、
さらでもさびしき　寐覺めなり。
いづべの灘に　漕ぎくれて、
人はまくらむ、浪枕。
いたくな荒れそ、沖つ風、
今宵は、舟路の　人ぞある。

今の夢路に　見えにたる
おぼつかなげの　一葉舟、
さ霧も波も　立ちゆよふ
あを海原の　末遠く。

わが思ふ人の　船にやと
よぶ間もあらず　夢さめて、
影もとゞめず　消えにたる
船の行方の　おぼつかな。

あな心なの　むら時雨、
またも軒端に　亂れつゝ。
しぬにしをれて　玉の緒も、
今や絶えゆく　心地する。

絶えでよ、あはれ、　玉の緒は、
ゆきにし人の　立ちかへり
ふる屋の時雨　今一度
おなじ枕に　きくまでは。



雜報

●ことほぎ　あら玉の年たちかへりて、ものみなおのづからに新なり、はれわたれる東の空うらゝかに、笑み榮えのぼる初日かげ、神代のむかしながらのものながら、今日といへど、新たしき心地して、うちあふがるゝや。このくもりなきかげやがて、大御代のみすがたにこそ。天地わかれにしよりこのかた、幾千萬代をへて、神のみことのまに〳〵、天つ日つぎたゞ一すぢにおはしまし、今よりいむさき八百萬代の後までも、みさかえまさん、はじめありて、終りなき御代を、なほとことはにと、この年のはじめに、更にくりかへし〳〵ことほぎ奉るになんかし。

君が代は
千代に八千代に
さゞれいしの
いはほとなりて
こけのむすまで

●大宮内の年のはじめ　聖上　皇后兩陛下例年元日二日の兩日には御同座にて、文武百官に拜謁仰付られ、參賀を受けさせ給ふなるが、いにし元旦には、聖上には御風氣に渡らせ給ひしを以て、午前には出御なく、いづれも　皇后陛下に拜謁して、參賀を申上げ、午後には聖上にも出御ありて、各國公使

及び同夫人の參賀を受けさせ給へり。二重橋上、蛾冠金裝の顯官、馬車を轢らせて、參内する者、織るが如くなりき。さて元旦參賀の人々は、在京各親王及び同妃殿下、各大臣、各樞密顧問官、幷に山縣監軍、野津東部都督、桂防禦總督、伊東軍令部長を始め、文武勅任官、德川、一條、二條、九條、鷹司、近衞、等の各公爵、各麝香間祗候、錦鷄間祗候、同夫人、等にして各國公使、同夫人幷に公使館員には、竹の間にて、御茶菓を賜はりたり。

●京都行幸啓　こん三十日、孝明天皇三十年回御祭典を行はせ給はんと、天皇　皇太后　皇后　三陛下には、こん廿日ごろいでたゝせ給ひて、京都にみゆきあらせられんとし給ふとうけたまはる。かくて三十日には　天皇　後月輪陵にいでませ給ひて、れはみみづから御祭あらせられ、皇太后　皇后兩陛下をはじめ奉り、金枝玉葉の御方々も御參拜あらせられ、又供奉の諸官員及　先帝に奉仕せし舊女官の人々までも參拜仰付らるべしと承る。

●御裳奉持者　皇后陛下には、去し元旦、桐の間に御出ありて、親任官、公爵、從一位、勳一等、諸氏の新年祝賀を受けさせ給ひしが、其のをり御正裝の御裳奉持を、特に仰付けられたる諸氏、及び小松彰仁親王妃殿下、山階菊麿王妃殿下の同正裝の御裳を奉持したるは、左の人々なりと承はる、此の御役を仰付けられしは、華族家子弟の最も名譽とするなりといふ。

皇后陛下御裳奉持人　松方正熊　山地元彦　小笠原壬午郎　溝口直彦
小松彰仁親王妃頼子殿下同　細川護立、德大寺彬麿
山階菊麿王妃範子殿下同　三條公輝、大原止郎

他の親王の妃殿下は、御都合にて不參せられたりと。

●節折、大祓、除夜祭　こぞの師走三十一日は、恒例に依り、宮中にて、節折、大祓、及除夜祭を執行わられしせられたり。節折の次第は正午十二時、掌典は、先づ鳳凰の間の御裝飾を奉仕し、午後一時。儀式係、宮内省官員は、禮服にて夫々參候す。かくて九條掌典長は、出御を奏請して着床臨御を待ち奉るに、頓て陛下には、近侍諸氏扈從にて、出御あらせ給ふ、掌典長、御前に進みて、天機を伺ひ奉り、次で侍從は、荒世の御服、同御麻を供じ奉るに御手に取らせ給ひて、返し給へるを、侍從は、之を掌典長、掌典に傳ふ。更に掌典は、荒世の竹を執りて侍從に附す、侍從はこの竹を以て、玉體を量り奉ること、都合五度、此の他、何ほ種々の御式ありて、入御あらせ給ふ。掌典は、この品々を携帶して、濱離宮に至り、海に投す。又午後一時三十分より、大祓の御式を、仝五時よりは、賢所、皇靈、神殿にて、掌典、式部職の諸氏、着床して、除夜祭を執行せられ、其の間、式部職附屬の伶人は、清亮なる樂を奏し、大祓式の節は、各廳の勅奏判任官、各一名、儀式に參列したりといふ。

●宮中御歌會　過ぎし十二月五日に御催しありし御歌會御兼題の御詠進は

冬夜長

さむけれと文たに讀てうちかつく
ふすまの下のふゆのよなかさ　高崎　正風

むらしくれ夢はやふれて老か身は
まてともあけぬ冬のよなかさ　池田　茂政

犬の子の母よふこゑはさむけにて
宏もよなかくもれもはゆる哉　津輕　承昭

明ぬやと思ふねさめにかみふれは　松浦　詮
また冬のよそうしみつのかね

わらしふき霜は冴ともいたつらに　大谷　光尊
長きこのよのねてわかさめや

ねられねは埋火をのみともとして　梅溪　道善
冬のよなかみわかしかねつゝ

埋火をいくたひとなくれこしても　清岡　長説
またわけやらぬ冬のよなかさ

冬の夜のいとゝ長くそれもはゆる　水野　忠敬
老のねさめのかすのかさねて

よひのまの時雨は雪とふりかはり　梅溪　通治
つもれとわけぬ冬のよなかさ

油をはさせといつしかともしひの　津守　國美
かけくらくなる冬のよなかさ

うつみひの消ての後はいとゝしく　柳原　愛子
なかされはゆる冬のよはかな

友のみなかへりし後もうつみひに　千種　任子
向ひてふかすふゆのよなかさ

長きよのあくるまつまに幾そたひ　小倉　文子
しくれの雨のれとつれぬらん

あまたゝひ結ひし夢はさめたれと　園　祥子
わけんともせぬ冬のよはかな

いたつらに長しとわひてあかす哉　税所　敦子
雪をあつめしひともあるよを

埋火もきえたるねやにゆめさめて　小池　道子
明るまつまそひさしかりける

冬のよはなはわけやらす玉くしけ　生源寺　いさを
ふたゝひみたひゆめは結べと

埋火もきえてすひつもひえたれと　黒川　眞頼
冬のよいまたあけんともせす

幾度かねさめのとこのさむきより
なかきをかこつふゆのよは哉　町尻　量弘

かきおこすねやの埋火きえはてゝ
さむさにたへぬ冬のよなかさ　滋野井　隆元

思ふとち語りつくしてかりそめに
ふす間もなかき冬のよはかな　清岡　長吉

うきねする池のまかもゝ冬のよの
なかきにあくかなく聲のする　坂　正臣

冬のよはなかくもある哉わくる迄
老はいくたひねさめしつらん　鈴木　重嶺

つきそへんすひつの炭も盡たれと
鐘の音きけはいまたよひなり　小出　粲

冬のよのなかきかうへに我やとは
わくるも遅し木かくれにして　植松　有經

いきたなき身も曉をまつまてに
冬のよなかくなりにけるかな　大口　鯛二

ともしひに埋火もみなきえはてぬ
閨のいたまはいつしらむらん　鎌田　正夫

よなかにもまたならなくに埋火の
炭はいくたひつきそへぬらん　千葉　胤明

むらしくれ折々すくるれとき〻て
わくるまつまそ久しかりける　遠山　英一

冬の日は早くもくれていたつらに
かたる夜居のなかくもある哉　鶴　久子

●御眞影を萬國赤十字中央部社へ賜ふ　瑞西國、ゼネバ府なる萬國赤十字中央部、社長ギユスターブ、モアニア氏は、從來聯合諸國の、各帝王を始め皇族方の眞影を申請け居たりしがこたび、我　天皇皇后兩陛下の、御眞影、及び赤十字社總裁、彰仁親王、同妃兩殿下の御肖像をも御下賜わらせられたきよ

し、飯田町なる、赤十字社へ願ひ越したるにて、同社より宮内省へ請願に及び、特別を以て、御允可の上、本月末の郵船を以て、墺國駐劄、高平公使の手を經て、同人へ下付せらるべしといふ。

●皇后陛下に臺灣婦人の頭裝品を献上す　臺灣美術の一種の、頗る精熟の域に達して、反りて本土をも壓せんとする程なるは、一たび彼地に遊たる、人の知る處なるが、此程同地より歸京したる石黒軍醫總監は、同地婦人の頭裝品を、上下を通じて、悉く取纏めて持ち歸り、之を　皇后陛下に献上したり。其中には、極めて精緻なる細工を凝せるものありて、貴婦人社會に用うる簪に附けたる鯉の如きは、最も美妙を極めたり。鯉の大きさ一寸許、黄金を以て之を造り、鱗は鑞造りにて、鱗々皆な動き、其手工の巧みなる、未だ本土にては見ざる所のものなりといふ。

●各宮妃殿下の青山御所參賀　在京、諸親王の各妃殿下は、去二日、午後二時より、青山御所に參殿せられ、　皇太后陛下に拜謁して、新年の祝賀を申上げ參らせしに、陛下には、御機嫌殊に麗はしく、受けさせ給ひ、御祝宴をも開かせ給ひしと。

●松の影　千代もかはらぬ御代の姿と、年のはじめの御題を、松影映水とぞ仰せ出させ給へるいとも畏きことなりける、某かもてる　後陽成の帝の宸翰の懐紙に、

千とせ經て花さく松のいとゞしく
　長閑けき水にかげぞうつれる

とありて、御墨の痕にはやかに、光澤潤ひて、實にこそ雲の上の御すさびとは仰ぎまつらるれ。是は慶長の二年の御製なり、とまをし傳へて、十襲の珍とせ

りとぞ。あはれ奇しきかな、その年は、丁酉にあたりて、今年と幹枝を同じうするのみならず、御製の中にこもれる御意こそは、さながら今年の御題のに外ならず、つらつら惟ひ見れは、慶長の丁酉、方に再び雞の林に事ありて、我が大日本の武威を耀かしゝより、茲に三百年、五たび丁酉を經て、その六たびなん、恰も今年なりける、鏡なす池の水、長しへに澄みて、朝日光麗かに、千歳の松翠いよゝ濃かに、條も鳴らさぬ大御代の惠の露は、雪氷積める千島の陬までも、豫章茂れる臺灣島のれくまでも霑はぬ隈もなく、青人草の老も若きも、舉りて太平を謳ひ、四方の國々さへ、我が大君の御稜威を仰ぎまつらぬはなかりけり、嗚呼三百年の後なる今日の足日に、かの帝の天つみそらに在す御靈よ、如何うるはしう思しめすらん。

●華頂宮殿下の御結婚　華頂宮博恭親王殿下には、こたび勅許を得て、公爵徳川家達の妹君と御結婚の約なりて、來ん九日の吉辰を以て、愛目度華燭の御式を擧げさせらるゝとなり。

●連歌始の古式　上野東照宮にては、來ん十一日、午後二時、拜殿に於て、徳川家連歌始めの古式を執行す、當日は、昔の連歌師一同、正服を着して出席し、尙ほ神官其他、徳川家一門、舊大名華族は、本人又は代拜者、參集して、式に列し、廣忠公、濱松在城の頃の古式を行ふと云ふ、これ了りて、福地源一郎氏の奉納に係る、平家琵琶の催しあり、家元某及び大槻如電氏等、之を演ずる由なり。

●支那婦人を英國に派遣せんとす　李鴻章は、明後千八百九十八年、英國倫敦に於て、開設せらるゝ、萬國婦人大會に、二人の支那婦人を支那派遣員とし

て出席せしむる旨を、外國傳道師に語りたる由、從來支那婦人は、幾千年の昔より、一寸たりとも、戶外に出でざるを尙ふ習慣ありしに、外國に迄、派遣する抔は、支那開闢以來、破天荒の事なりと云ふべく、是れも李鴻章漫遊の結果なるべし。

●蜜柑の事　人皇十一代　垂仁天皇、火の國（今の肥後）に渡らせ給ひし時、支那より蜜柑を献上せしが、天皇之れをきこし召し給ひしに、豫ての御病程なく癒ゑましけれど、天皇此の種子を、溫暖なる處に植うべしと詔ありしをもて、同國、八代郡、高田といふ所に植けり、これぞ八代蜜柑の濫觴にして亦我日本蜜柑の元祖なりとす。其の後　景行天皇、九州御巡篭のをり、其の樹を御覽あり植主其の結實せざるよしを奏上に及びたるに　天皇宣く、此沖に水島あり、中に天然生の枳殼あるべければ、之を臺木として、接木すべしと、のたまへるを、植主詔を奉じて、たかはず行ひしに、此より結實するに至れり。依て年々、之れを天皇に献じ奉りしが、其後亂世打續きて献上も止み、降て豐臣氏、麑島征伐の途次、高田村を過りけれど、此蜜柑を献じ且つ其の來歷を告げゝるに、豐臣氏は、蜜柑は吉相なれど、目出度歸陣の時、受納すべしとて、歸陣の節、再び此地に來り、斯る由緒ある蜜柑なれど、爾後一層鄭重に植栽すべし、と命せり、夫より松岡某なるもの、維新前まで、之れを仕付け來れり。而して、何時の頃よりか、再び宮中に献じ奉る事となり、年々肥後の領主、細川侯より德川將軍へ屆け、精選して宮中に献上すること、なりしが、其献上蜜柑の通行に遇ふときは、下民は更なり諸侯も下馬の禮を行へり、又風說に依れど、德川家に於て、精選の際、役人等は

蜜柑の疵などを名として、各持下りたるもの、一個一分にも價ひせしが、人々之れを以て、火避けの守りとし、爭ふて之れを買求めしと。

現今紀州產の蜜柑に、八代と稱する種類あり、此は其の種子の八代產なるが故に、此の稱あり。傳へ云ふ、加藤氏の時代に、同氏の婿に當る人紀州に在りけれど、其の緣故を以て、之を紀州に送られたり。爾來益々繁殖して、現今同地柑類の一部を占め居るといふ。然るに、維新後其の蜜柑畑を士族授產地に繰り込み、入札拂となるに至れり。是れ此の蜜柑の衰微したる原因にして、今は當時の蜜柑木は、僅に二三を殘存して、其諸蔓掛けとなるに至れり、若し此儘にして押移らむ、終に全滅を免る能はざるべしといふ。

●世のかゝみ　今の大御代は、あしきものをきため、よきものをはめ給ふみれきて、いと明らかにして、大御惠のあまねきもいとたふときことにこそ、神風の伊勢の國に住める御民、樋口ゆき女は、德行卓絕のよしを以て、いにししもつき十二日、賞勳局より、綠綬褒章を下賜せられたりと、いとありかたき人なり。

三重縣伊勢國三重郡富洲原村
伊藤孫七養母
樋口ゆき

資性貞實、妙年にして、同村伊藤孫左衛門に仕へ、尋て伊藤孫八に嫁す、生計貧困、既にして夫疾病に罹り、且明を喪ふ、乃ち夜作賃買、病夫を看護し、幼孩を鞠育し、艱楚備に嘗め、衣帶を解かざること累歲、適舊主產を失ひ、一家流離、幼孫敬太郎の賴る無きを憫み、自ら之を哺乳し、負債を代償し、長して旨するに及び、衣食を給して、其祀を存せしむ、今や家產稍裕なるも、敢て暇逸せす、子女を督勵して、行を正し、業を勉めしむ、其

操守四十八年一日の如し、閫家輯睦、隣里風化す、洵に奇特とす、仍て明治十四年十二月七日、勅定の緑綬褒章を賜ひ、其善行を表彰す。

●子福長者　世の中に、さちはあれども、家族の多きほど、さちなることはあらじ。こゝに秋田縣、平鹿郡、横手町に住みて、豫て富豪のきこえ高く、横手銀行の頭取役を勤むる、藤澤嘉兵衛といふは、今年六十路の高齢に達したるが、尙矍鑠として、壯者も及ばぬばかり健かにして、其の妻某も亦、無病にして五十二歳の今年まで、未だ一度も藥餌を嘗めしことなく、藤澤家に嫁ぎてより、殆んど一年毎に産の紐を解き、三十五年の間に、二十七人の子女を擧げたり。内男は三子の金太郎とて、ことし二十九歳になれるもの一人にて、他の二十六人は、悉く女なるが、兄弟みな息才に育ちて、至極健全なりといへば、一家團欒、和樂の歡聲は高く戸外に漏れて、老夫婦の樂みも、さぞやと思ひやらるゝなり。其の上に、金太郎氏は、曩に東京なる早稻田専門學校を卒業して、郷に歸り、妻を迎へて、現に四人の女子を擧げ、他の二十六人の内、長女初子（三十三歳）以下他家へ嫁ぎたるもの、二十二人の内、初子は、男一人、女三人の子を儲け、その外の者も、亦三四人の子を擧げざるはなしといふ。されど、近き頃、嘉兵衛氏の父君某の八十の賀筵を開きしときには、二十三の子夫婦ども、何れも孫を着飾らせて、或は手を引き、懷に抱きて、東より西より、南より北より、つどひ來り、玉の如き百餘人の垂髫は、一堂の内に集りて、和氣藹々たりしは、福祿壽もかくやと、疑はるゝばかりなりしと。世にもめでたき事にこそ。

●鶴舞龜躍　年あらたまりて、瑞雲四海に棚引

き、祥氣靉靆たる中に、最も目出度長壽談は、人みなの聞かまほしくすることなれは、きゝえたるまゝをあつめものせん。

福島縣、岩代國、伊達郡、山舟生村の、佐藤九重郎と云ふは、今年百七歳の高齢者なるが、若かりし頃より一合二合位宛の酒を嗜み、煙草も人並に喫し、今尙は無病壯健にして、矍鑠たる事壯年にも劣らず、朝は家族に先立て臥房を出で、朝飯の支度に火を焚付け、後に家族を呼起すが例にて、長男の某、本年八十八歳なるが、とき〳〵朝寢するとて、翁は呟き「如何も今の若い者には困る」なぞゝ小言を云ひ居る程なれど、養蠶其他の家業も人より抽んでゝ健やかに働く由、また翁は元來一字一點も讀書のならぬ人なりしに、八十歳の時、大いに感ずる所ありて、徐々と手習を初めしに、村人等は、陰口に九重郎の爺さんが八十の手習を初めたと、嘲けるを耳にすれども、翁は頓着せす、唯一意一心に勉強せし効ありて二十餘年の間に、讀書の道を辨へ、今は新聞紙などを苦も無く讀み得るに至りしかど、村中にても物識と持囃され、何か出來事ある時には、翁を賴みて、捌きを附くると云ふ程に敬はれ、一家數十人の玄孫曾孫等と共に、いと有福に暮し居るとぞ。

次は一家擧ての長壽にして、最も目出度もの、磐城國、東白川郡、竹貫村大字田口の大樂清喜造（九十四年）は妻かね（八十九年）長男清左衛門（七十三年）妻とめ（六十九年）孫清藏（五十五年）妻かね（五十五年）曾孫彦次郎（二十六年）妻たせ（二十五年）と四夫婦打揃ひ、何れも壯健にて、春日遲々たる歲月を送り居り、總年齢を合すれど實に四百八十六歳となり、尙は彦次郎には、今年四歳の娘ありとぞ。

次は越前國、坂井郡、本郷村、字奥平、山本曾平の祖父、長五郎と云ふものにて、今年八十九歳の高齢に達し、舊臘米壽の祝宴を開きしが、長五郎の父も曾平といひ、四男三女あり、何れも長命にして、長男宗平は八十歳、二男長吉八十二歳、三男長次郎八十八歳まで生存し、其四男は即ち長五郎なり。又た長女いろ八十六歳、次女この八十三歳、三女うゑ八十歳にて、右の姉妹は今倘は存命し、何れも壯健なる由。斯くも兄弟姉妹揃ひも揃ひて長命壯健なるは世に類稀れなる一族一家の幸福といふべし、殊に長五郎は、身體頗る強壯、未だ眼鏡を用ひずして、如何なる細微なるものをも視る事を得ると云ふ、同翁は幼少の時より、三日と病床に臥せし事なければ、醫師の診察は固より、一貼の藥すら服したる事なく、性行質朴正直にして、農業に勉勵し、寸時と雖も休息せず、まめ〳〵しく立働くのみか、兼て山林の保護に努むる事厚く、又常に衛生に注意して、毎日必す手足頭髮を沐浴し、三食は其程度時刻を定めて多食を戒しめ、酒及び煙草は嚴禁して、少ても用ひず、毎朝四時に起き、毎夜十時まで繩を綯ひて臥すを日々の例として、今日に至れるが、是れぞ長壽を保つ原因なるべしと。

又次は甲斐國、北都留郡、猿橋の松葉屋、奈良利兵衛にて、同人は本年八十二歳なるが、今に眼鏡を用ひざる程にて、剛强壯者も及ばず、殊に一家三夫婦打揃ひて、孫彦を合せ五十二人に及び、何れも壯健にて何不足なく暮し居る由。

又次に筑前國、遠賀郡、黑崎村、字藤田の勝田喜吉一家にて、同人は本年七十六歳なるが、六十歳以上の弟四人あり。舊臘亡父の追悼會を營み、併せて盛

大なる壽宴を開きたるに、當日會合せしは、この五人の子二十名と、孫三十五名にして、近郷其目出たきをたゝへざるは、なかりしと云ふ。

又、常陸國、新治郡、石岡町、久保田善三郎の祖父善助夫婦は、去歳、結婚後五十年に當り、父半助夫婦も、同二十五年に相當したれど、一家三夫婦、分家二夫婦、子孫數十名と共に、盛なる宴を擧げたる由、實に目出たしとも目出たし。

●ことわり　新年附錄必そふべかりしを。彫刻などのはかどらずして、本意なくも、このたびは、をきつ。こん廿日をまちてよ。

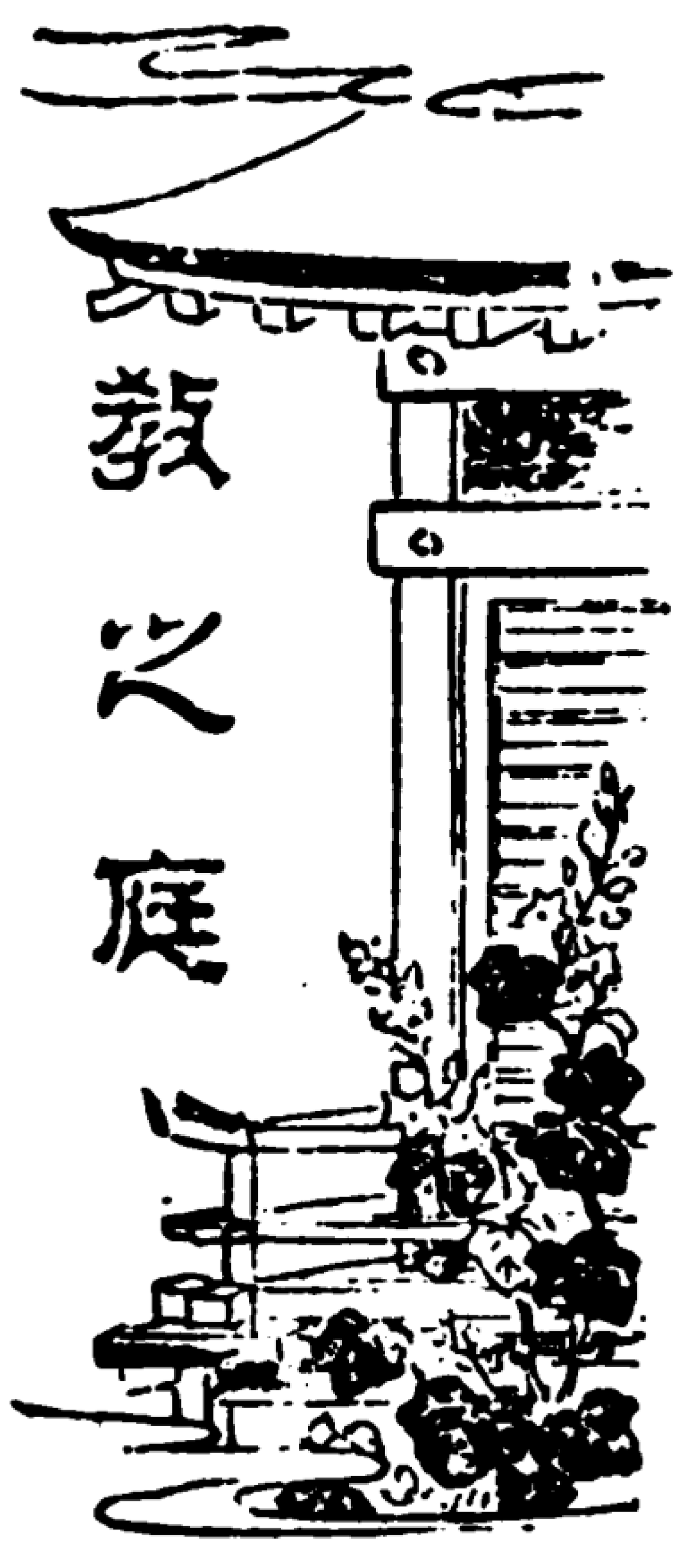
●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

夫れで今の樣に、私が申しまするに付て、方法はどうするかと云ふと、其法方のことは勿論學校に於て色々と敎へられる譯でありませうし、今斯うだと云ふ事を申すには及びませぬが、茲に一つ私が平生考へて居る事で、或は學校の方では、さう云ふことを迄はなさらぬかも知らぬ、或はなさらぬのみでは無い、多少意見の違ふことがあるかも知れませぬけれ共、一つ述べて見まするが、唯今申す樣なる人の頭を拵へ、子弟の頭を拵へると云ふ事に付ては、普通の敎訓は學校で受けませうが、幼年子女には、其他に古人のした言行を多く集めた書物を、平生繰返して見せるやうにすることが餘程宜いと思ふ、先づ人の母たるもので、家に子供がある人と假に定めて見まするど、此子供等にどう云ふ事を敎へて行くかと云へど、マア年頃にな

つたら、學校にはやりませうけれ共、學校の授業の側ら、又まだ學校にやらない中にも、武者や忠臣孝子の繪本抔を多く宛行つて見せる事は、餘程有益なる事であらうと思ふ。私も子供の時分には、繪本太閤記抔を餘程見て居りましたが、見るに從ひ、此處は誰がどうした所である、此處は誰がどうした處である、と其繪を以て歴史を説いて行くことが次第に出來ました。是も一番最初は、唯繪の上から得たる智識であるが故に、詳しいことは知らないけれ共、次第々々に、大概豐太閤の生長した工合抔は見へて行きました。恁樣な風にして、曾我物語抔を宛行つて讀んで行きますと、どうも孝行といふものは爲なくてはならぬ、親の爲には一命も抛たなければならぬといふ心を催して來るのであります。勿論私が左樣に言ひまするど、古の流儀の忠孝を今日でも、矢張りやるか、今日は復讐といふ樣なることは禁せられて居るのである、夫れに曾我物語を見たならば矢張りさう云ふ心になりはしないか、或は又烈婦の事迹にしましても、古の身命を抛つて夫に忠を盡し貞を盡した、例へば、袈裟御前の如き、アヽ云ふ樣な人情を矯め過る樣な事柄を、見たり敎へたりするのは、甚だ宜しく無いては無いかと云ふ論も一方に起りませう。成程私も、決して人情を矯め過る事を學ばせるのが宜しいとは言はない、故に、其間には、多少心を用ゐて敎へなくてはならぬ、或は繪本抔も、自から種類を選ばなくてはなりますまい。併し、物の標準となるものは、どうしても我自分の行ふよりも、少々は違つた樣なる事があつても、夫れは已を得ない事があらうと思ふのでありま

す。而して又、古人の履歴を今日から見て、幾らか自分の素養を作る事に志ないと行けない、夫れで、外國人が、段々日本人の、今日の如く忠君愛國の情の强いのは、どうであらうかといふことの證據に、能く、品川泉岳寺の四十七士の墓の事が引てあります。試みに日本人に行て見ろ、横濱から段々這入つて行くと、品川といふ所がある、そこには泉岳寺といふ寺がある、そこに四十七士が葬つてある、其四十七士の墓には、香火の絶ゆる時が無い、其四十七士はどふいふ人である、實に太平の世ではあつたが、我君不幸の死を遂げたと云ふが爲に、言ふに言はれざる艱苦を忍んで、とう〳〵自分の身を抛つて仇を報じたのである、如此の氣象を日本人は今日まで受繼ぎ來つた、故に日本人は此墓所に到つて香火を献ずる者絶へる暇がない有様である、是で以て其國民の氣風の一班が見られるといふ風に論じてあります。私も先達て、久振りに泉岳寺に行て見ましたが成程今日に至る迄も、香火の絶ゆる時が無いのであります。又世間で能く言ひますが、芝居が流行らぬ時に忠臣藏さへすれば、何時でも流行ると云ふ樣なことを言ふ、成程さうらしうございます、東京見物の田舍人は、大概皆彼寺に行て義士の墓を見ます、其見る所は景色杯の爲めでなく、日本人の氣象として、義士等が辛苦艱難をして君の仇を報じたといふ事を頭に感じ、其迹を弔ふのである。それで、此の如き事を頭に感ずる氣象は、男子に限らず、婦人社會迄も傳はつて、田舍の爺さん婆さん迄も、矢張り夫れを傳へて居る。



一月五日兼題　都新年

天

初日かけ千代田の宮にさしそめて
　年たちかへるろらのゝとけさ
長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野　文子

地

うら〳〵とあさひにはひて九重の
　みやこより先とし立ちにけり
肥後國熊本市東寺原町　田代　艶子

人

年たてはみやこはわきて家ことに
　みよはきかはす聲そにきはふ
北海道函館區富岡町一番地　田畚秀代子

秀逸（十五首）

くつの音もことさら繁くきこゆなり
　みやこ大路のとしのはつそら　佐々小琴子

ことさらにひかけ麗し立ちかへる
　としのはしめのみやこ大路は　佐々有鄰子

たちかへる年のはしめは冬なから
　みやこ太路のにきはしきかな　遊佐とよ子

新年のはかひにまゐるあてひとの
　こまのいなゝく聲もゆたけし　丸山すま子

大君のひかりによりてみやこ遊は
　ひなにことなる年やたつらむ　進藤もと子

立ちかへる年の初荷のをくるまに
　みやこ大ちもせはしとそ思ふ　小町谷里江子

うち日さす都のちまたにきはひて
　としのはつひをあふく婚しさ　小町谷園子

馬くるましけきみやこもあら玉の
　年立つけさはのとけかりけり　三谷起美子

ことしけきみやこ大路もあら玉の　德永萬壽子

　年たつ今朝はしつけかゝりけり

年きぬときぬきよそひて遊ふ子に
　はなの都のさまはみゑけり　眞鍋　直子

殊さらにのどけかりけり大きみの
　いますみやこの年のはしめは　田津木久子

あさぼらけみかど拜みの馬くるま
　音ものどかにとし立ちにけり　師岡千代子

ふるさとの親に見せまし大きみの
　ゐますみやこの年のはしめを　三笠　嘉子

住みなれし身にもめづらし大君の
　みやこのけさの年のはしめは　南　淑子

ゆきかよふ車のおともしけきかな
　みやこ大路のとしのはしめは　犬甘　芳子

（以下原稿到着順）

綾にしきゆきかふ年のはしめこそ
　さすかに花のみやこなりけれ　星野　式子

なにこともみやこはひとの鑑にて
　花も實もあるあらたまのとし　星野　仁子

あたらしき年は何處もかはらねと
　みやこは人のはなとたゝへん　星野康世子

あたらしきとしをむかへて都ひと
　よろつようたふ聲ののどけさ　春永己巳子

みわたせはとしのはしめの門松に
　みやこも鄙のけしきなりけり　住山　幾子

君のますみやこのそらの初日かけ
　御稜威と共にかゝやきぬらむ　名取正代子

年たては君か代いはふもろこゑは
　みやこの空にとゝろきにけり　坂田きみ子

もゝしきの大宮ひとのそてかけて
　年たちかへるけふののどけさ　羽田三緒子

みやこひとうまに車にいとゝしく
　年立つ今朝のしけくもあるかな　平山さを子

軒ことにかゝけていはふ日の御旗
　見るにもしるし年のはしめは　西元とも子

梅か枝の雪踏みわけてうくひすは
　わけしみやこの年を祝くなり　山下ふゆ子

都よりまつ立ちそめしにひとしを
　誰かは千代とあふかさらめや　橋口菊枝子

改まるとしのこゝろはかはらねと
　みやこの空そわきてのどけき　橋口梅枝子

初日影うらゝにさしぬ日のみはた　たてつらねたるみやこ大路に　鳥飼千重子

治まれる御世のしるしと玉しきの　みやこの春の賑けくあるかな　大久麻政記子

あらたまのとしの始にしるきかな　みやこの空にみよのさかゑも　都　志津子

治まれる御世の恵みのいちしるく　みやこの春のにきはしきかな　間片　信子

九重のみやこのはるを八千とせと　かはらぬ松にいはふけふかな　碓井和可子

れしなへて年のはしめを祝へとも　みやこはことに賑はひにけり　碓井　武子

あら玉の年のはしめはみやこちは　わきてのとけく春めきにけり　碓井　信子

玉敷のみやこはことににきはひて　新たまりたるとしのめてたさ　遠藤のよ子

あまの戸をうらゝにあけて日の本の　はなのみやこに年は來にけり　田島　寵子

新しきとしのはしめにひゝくなる　つゝれときゝて祝ふ今日かな　高橋ふち子

新しきとしのはしめのめてたさは　わきて都にれもはゆるかな　高橋たま子

はるかすみいまた都にたゝねとも　にほふ初日のかけはのとけし　岸　せつ子

み旗たてかど松たてゝ羽根まりの　れともにきはしみやこ大路は　岸　せい子

むつきたつみやこの空の長閑さは　またきに春のこゝちこそすれ　北川　花子

故郷はまたとほけれとすめらぎの　御ひさまちかく春にあふかな　森山　光子

年のみか人のこゝろもあたらしく　みやこの大路にきはひにけり　後藤のふ子

くれなゐの塵立ち烟るみやこさへ　としの始めはのとかなりけり　金田峯野子

朝つくるみやこの空はのとかにて　としの始めろゆたけかりける　大谷　友子

あら玉の年たちぬれはほの〳〵と　都の野遊にあさかすみたつ　藤原　葩子

さゐわたる空は昨日にかはらねと　みやこそ今日は年たちにけり　八島ゐい子

大君のめぐみのつゆにうるほひて
みやこ大路のにぎはしきかな　森山　英子

あらたまのとしたちかへる玉敷の
みやこの空にたつなきわたる　湯淺うの子

いつこにも年の始めはわかねとも
みやこはまして賑はしきかな　懸田ふさ子

年かへるみやこのそらの長閑さを
御代壽きてたつぞなくなる　佐藤よし子

さかえゆくみやこ大路の家つゝき
春をくはりてはつかせそふく　青木　春子

まちいはふ心はたれもかはらねと
みやこよりこそ年はたつらめ　鈴木みゑ子

新玉のとし立ちかへるけふとてや
みやこのそらも長閑かるらん　祝　靖子

暮れゆきしきのふをこそと新玉の
としのはしめを祝ふみやひと　吾妻ちか子

九重やみやこのそらものとかにて
戸毎にみゆる日のみはたかな　諸井久良子

かしこしな御門にならぶ松竹に
しめゆひかけしとしの初めは　舘脇ます子

大君のみましのにはにみやひとも
としの初めをいはふけふかな　池谷　富子

あさひかけさすかみやこの門松に
みちせまけにも見ゆるけふ哉　杉浦　糸子

心からのとかに見えてにひとしは
みやこの空そしつけかりける　田中　冬子

新玉のとしのはしめとみやこひと
戸ことにいはふけふそ嬉しき　柳田　里子

朝日かけ千代田の宮にかゝやきて
くもりなき代のとしたちに鳧　鳥居　藤子

やすらけきはなの都に植ゑし松の
枝もならさぬ年のはつかせ　西堀　光子

日のもとの君ます里のあらたまの
としのひかりもてりまさる哉　山本　勝子

初日影のほるひかりののとかにも
みやこのそらは年立ちにけり　三原　孝子

年浪のたちかへりたるしるしとて
みやこ大路はみはたひらめく　錦織さち子

あたらしき年の始めのよろこひに
みやこ大路はにきはひにけり　伊藤　錦子

うたひつゝ御代をいはひて都ひと　伊藤きよ子
年立つけさのさまそめてたき

日の御旗みやこ大路になひかして　田代　綾子
先いはふなりとしのはしめを

君か代を八千代とほきてにひ年は　福木　鉉子
みやこ大路のにきはしきかな

あら玉の年をほかんとみやこひと　大竹　治子
にしきかさりて祝ふけふかな

年たてはみかと拜みのうまくるま　服部勝美子
みやこ大路にみち／＼にけり

あら玉の年のはしめのゆたけさを　武政常磐子
千代田のみやにまつ仰くかな

何處にも今朝立つ年はかはらねと　永井さい子
わきてみやこの賑はしきかな

花の都君のめくみにうるほひて　織田　鋭子
軒のまつたけいろまさりけり

山里はゆきにこもれとみやこには　土肥　仙子
としのはしめをいはふけふ哉

いつはわれと年の初はやちまたの　吉村　操子
みやこ大路そことにきはふ

うち日さすみやこ大路に年たちて　野崎　鐐子
人のゆきゝものどけかりけり

宮人もきぬきさかりてまゐのほる　野崎　章子
年のあしたはのとけかりけり

いつる日の光のとけくたつとしに　山田　璋子
花のみやこはなほそさかゆる

何となくさわかしかりし音たえて　森岡　濱子
みやこ大路のけさのしつけさ

あら玉の年のはしめをことほきて　井出すゞの子
みやこれふちにつとふもろ人

豐かなる年のはしめのしるしにや　内田つる子
みやこはいとゞにきはひに鳧

いとはやも都れはちのたまやなき　横田　秋子
なひくとみれは春はきにけり

なへて世のならひなりとて都ひと　横田須磨子
先こゝろよく年をほくらん

ゆたけさのかきりなりけり都へは　荻原　章子
にひ年うたふこゑのとけく

門毎にまつ立てそへてあらたまの　大谷津琴子
としを迎ふるみやこひとかな

門ごとに松を立てつゝあらたまの
としを迎ふるみやこひとかな　石川すけ子

年立てはみやこの空のうらゝかに
かどまつたてゝいはふもろ人　高橋とし子

立ちかへる年の始めのことほきは
雅そことにめてたかりける　佐藤ゆり子

いつ見ても色のかはらぬ松立てゝ
にひ年祝ふみやこひとかな　植木とよ子

うなゐこかむれつつあそふ新玉の
みやこの春のにきはしきかな　小曾根しう子

あけぬれは都れはちのにきはしき
年こそいともゆたかなりけれ　仁井田とみ子

みやこへも年の初めのことほきは
君か八千代のほかなかりけり　畠山千代子

みやこちの年の初めのにきはひも
わか大君の御かけなりけり　畠山百合子

立ちかへる年のはしめはみやこ人
大路せきまて四方ににきはふ　畠山ゆき子

新玉のとしたちかへるこゝのへの
ちよたのそらにたつ鳴き渡る　日高かす子

大君のいますみやこはいかはかり
のとけき年やたちかへるらん　降田槇子

みやこ路はのとけき年をほく人も
しつこゝろなく徃き來する也　齋藤きく子

たつ年をことほきまつるうま人の
きしる車のおとのしつけさ　大多仁貞子

新しきとしのみやこのにきはひを
うれしと君もみそなはすらむ　林久子

たましきの都のそらはことさらに
のはるはつひの影ろのとけき　淺井鈴子

あら玉の年たつけふはあしたつも
千代たあたりの空になくなり　長山孝子

みとりなす都れは路のかとまつも
初日のゑまひさしてのとけき　白石藤子

もろひとのゆきかひしけき都とて
年たつ今朝のにきはしきかな　澤よし子

みやこちに立かへりくるあら玉の
年まちえたるけふのたのしさ　加藤きく子

新玉のとしのはしめのしるしとて
花のみやこはまつかすむらん　長洲餘野子

日のみ旗なびく大路にをとめらの
　むれゐていはふ君かみよかな　髙田きよ子

一夜にて去年とことしのさまかへて
　いちしるしきは都なりけり　中川浪江子

日々にあらたまりゆくみやこへも
　年あたらしく見ゆるけふかな　下元もと子

いつはあれと年立けふは玉しきの
　みやこはことに賑はしくして　重松たか子

馬くるま行かふさまもゆたかなり
　はなのみやこの年のはしめは　久松勢伊子

みや人のそてをつらぬる行かひに
　年はくさまの見ゆる今朝かな　野中あさ子

馬くるまゆきかふれともいさましく
　みやこ大路にとしはたちけり　彦坂たか子

いそかしく行かふ人のあとたえて
　大路ゆたかに年は來にけり　新田のり子

君か代を祝ふこゝろのゝとけさは
　都の年のはしめなりけり　松岡竹露子

立かへる年のしるしとみやこちは
　はや九のへにかすみそめけり　木川　里子

一月五日兼題　盆梅を贈る

天　福島縣伊達郡掛田村字中町　佐藤よし子

春のならひに、いぎたなく、起きもやらぬを、窓の隙もる朝東風の、いとなつかしく、やをら起き出で見るに、軒端の梅は咲かねども、日頃めでつる盆梅の、二もとながら、三つ四つばかりはゝゑみて、げにおもしろう打かをりぬれど、魁けてこそ色も香もあれの歌も思ひ出でられてなん。されどこの一もと學びの道にいそしみ給ふみ机の下に、分ちまゐらす。花の心もみそなはして、いつくしみ給はらんには、こよなう嬉しき事にこそ、かしこ。

地　筑前國嘉穂郡飯塚町　林　久子

あれはてし庭のかたへに、うちすておき侍りしはち植ゑの梅の、霜雪にもたゆまずをれず、年のうちよりいさましうゑみ初めたるが、はつ日の影のゝどけさにさそはれ侍りてにや、今朝は三つ四つさき出でゝ、ならぬ香のかよひきて、いとなつかしう思ひ侍れど、かゝるふせ屋にかれかんかいとあたらしそ惜れど、色をも香をもしる君にとまゐらするを、あは

れとめでいつくしみ給はらむ、こよなき幸ひにこそ
かしこ。

人

播磨龍野　眞鍋直子

かねてその御母君の、草木の花を好ませ給ふ中にも、殊に梅をめでさせ給ふと承りしが、年は改り侍れども、いまだ寒のいとたへがたうて、いづくの梅もつぼみのかたう侍るよしうけ給はれど、いかにさう〳〵しうればし給ふらんと思ひ給へられてなん、此の鉢の梅よ、日々ひあたりのかたへ〳〵と廻し、いたはりればしゝが、やう〳〵はゝゑみそめ侍りぬれど、みそのゝ花の咲き出るまでのみ心やりにもとて、一鉢まゐらす、おのづから咲きいでたるには、似るべうも侍らねども、たゞ早ざきのめづらしきをとてなん、かしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

南枝北枝の梅は、開落ことなるものを。ましてむらきもの心をこめて、室の内に、やしなひしものから、はつ春の日影をも待ちかねて、年のはじめの風和なるに、みつよつふたつにほひそめぬる盆はひとつならで、いつつ、むつ、になりぬ、中垣へだてたまはぬ貴嬢の御床のもとにまゐらせつ、あな田舍人の手ふりとな見すてたまひそ、好文木の名おへる花にしあれど、學窓のあたりの置きものになし給はらむ、こよなき名譽と、梅もよろこびなん、あなかしこ。

金田　みねの子

新玉の年立ちかへりて、春とは云へど名のみには候へは身にしむ寒風の、いと堪へがたく、庭のまがきの梅が枝に、鶴の毛衣の重なれる樣に、白雪の降り積りて、鶯の初音を聞くは、まだ遙々しき事なるに、獨り床の盆梅のみ、いみじくも二三輪色香ゆかしく咲き出で候まゝ、御秀詠の料にもなり候はんかと一鉢御目にかけ候、
御愛しみ給へる籠の鶯に、香をしたはせつゝ、御文机の友となし給はらむ、花もさぞ本意なるべしと存じ候、かしく。

武政常磐子

年の内より、ほゝ笑みそめし、鉢の梅も、人のこゝろにならひてや、年立つ今朝は、匂ひも一きはうるはしく。咲き揃ひ、あふるゝはかりの笑顔もて朝日

に向ひ、君か代は千代に八千代と云はぬはかりの有様なれは、愚なる身にも、何となくなつかしかれと、日頃れと丶ひも及はぬ程の中なれは、このま丶使をもて君に贈るになん。

矢島ゐい子

父が手活の盆梅、節にはもれずて、此程より一二輪にほひをかしうほころひ候へど、枝などれもしろくつくれるものには、たくうべくもあらず候とも、御目にかけ候、たゞ去年よりの心づくしをのみ、御覧ぜさせたまへ、心やりたまひて文机の御すみなど、かうたゞはゞ、こよなき花のほまれにこそ、かしこ。

遊佐とよ子

晴れわたりぬるみそらのけしきはいとれもしろきに、さきほど御妹君越させたまひし折、ふる年の中より、籠の鶯に湯氣など入れさせられ、きのふけふはひたすら初音を待ちたまふるよし御物がたり候ひつるに、さてこそ小むろの梅もと思ひたち、ひそかにのぞき見侍りしに、なほ咲きぬといふさはにには至らねど、ゐならぬ香のればつかなきどかりなるもにくからず、父にこひて、此一鉢は與へられ侍りぬ、治る御代のあたらしき年の始のうれしさや、春をも待たで咲きいでつる梅を友とせむ、いかで鶯も美しううたはざらむとて、進めまゐらするになむ。

長谷川はる子

堪へかたき寒さに、ひねもす書斎にのみたれこめて、盆栽をだにうかゞふこともなかりしに、窓の隙もる雪吹のあやしうなつかしく薫り來れど、やをら戸を開きて打見るに、雪にまじりて、紅梅の一鉢咲き初め居り、半開のさまいとめづらしく、獨り見侍るにあたらしう思ひ給ふれど、いとしたりがほには侍れども、色をも香をも知る人にこそとて、御覧ぜさせ侍るになん、硯き机、閑なる窓のあたりに置き給はど、春に先つ花も、いと榮わることとて、いかどかり嬉しからまし、かしこ。

鳥居藤子

年はあらたまりぬれど、いまだ春の立ち侍らねど、鶯の初音をきかんほどもいと心もとなし、いみしき寒さに、たれこめてさうさうしき日をれくるは、いと本意なきことになん、さるからに、春を待つ間の心遣りにもと、去年より梅のさ丶やかなるを、小鉢に

とり移し、おほやけより歸るやがて、日毎日毎に土かひ水やりなどしたる心づくしにや、はやこの頃、笑をふくみ、えならぬ匂をはなちて、いとほこりがほなるもをかし、たゞにたえなる花の色、ゆたかなる匂ひのみかは、降り積る雪の朝、吹きすさふ風の夕も、つゆたにその性をまけず、よく堪へ忍びたるその操は、またなくゆかし、かくもらうたき、かくもめでたき花を、唯ひとりもてはやさんはあたらしう覺ゆる物から、かの待たせ給ふ初音のたつきにもと、一鉢まゐらす、淨き文机明らかなる窓のあたりにすゑ給はゞ、春に先たちし花もいと榮えあることになん。

西堀光子

嚴父の、梅を小鉢に植ゑて、いたく樂しみたまへるを、慈母の二ちは三はちを、妾の文机の前なる明けき窓にすゑ給ひし深き御恵み、いみしくありかたきことにて文讀みて倦みたる折々に見れどしほらしく二つ三つ、咲きけるさへよろこはしきに、笑の含みより馥郁たる香の洩れくるをかけは、おのつと心も清み渡り、氣も爽かに學びの業も一入進むへうおもはゆることのいとたのしく、よき友えたる心地してありけるに、ある雪の朝、慈母のいふかしきたつねに、いかなる御示しのあるにかやと、ひねもすおもひあんじけるに、梅花の雪中芳香を放つは、女子の道たる操てふことに類ふと、古へ人のいひけんこと、おもひいて御敎の高きにいたく感じ、先に友とおもひしことのうらはつかしくなるまゝに、はらからも及ばぬ君の、同じ思ひにあらまほしく、かく一はちを贈りまゐらするになん。

山本勝子

年立ちかへる朝の空の景色、名殘りなく曇らぬうらゝかさに、心もおのづからのびらかにて、小簾に見えぬ風も春のやう覺ゆる折柄、ふと見る一鉢二鉢に、梅の花一つ二つ三つ咲き初めたるいとめづらし、諸共に年の始をはゝゑむらん、おくれぬ御代のためしの思はるゝぞめでたき、春は我家に立ちにけりと打ち誦ずれど、祖父なる人の聞きつけて、あやしの鶯の音やと、日頃の手入れ甲斐ありしを打ち語はらるいみじき口つきなりや、さる夜の花の品定めに、梅こそ勝れとめでたまひしふしも思ひ出でられ侍れ

ば、請ひ受けて、一鉢贈りまゐらせぬ、あはれ君ならでの心とも見給へかし。

伊藤きよ子

病の床にふし沈みつる頃には、いともねむごろに度々おとづれ給ひて、なにくれとなくさめたまはりし事のうれしかりしよ、其後は如何にか暮したまふらん、こなたにては、日にましをこたり勝ちにて、終日ふしどにくらし侍るもわびしく覺えける折から、何がし大人のたづねたまひて、四方山の話のついで、かよわき者の、いろ〱なる花杯作るはいかにもよきことにて、そがためすこやかなる身となりたるも澤なるよし承り、梅杯作るには、年頃なれ給ひし君にしあれば、作り方杯ならひて、寒紅梅の一二種鉢植となし、朝夕彼の君の敎へのまゝになし侍りしに、からだは日にましすこやかに、梅は日にまし景色よろしくて、今はうるはしきつぼみでき、はや一つ二つ綻びそめ、中々見所侍るに、一人見るもあたらしう思ひ侍れば、色をも香をも知る人にこそと、一鉢おくり參らすになん、あなかしこ。

三谷起美子

年立つ朝をことほぎてか、今日しもまがきの梅はほころびそめ、そが根に置きし鉢うゑのも、世の常ならぬ香を洩して、鶯まち顔なるもをかしければ、所せき賤が庭には似つかはしからぬやうに覺え侍り、君にはいととうより、えならぬ香を御袖にうつし給ふべければ、これは木の葉ちらす風にも心をいため、降る雪にも枝折らせじと軒に取り入れ、咲き出でば、「東風吹かば」とのたまひし昔忍ばんものと生ほしたて侍りしものなれば、君こそは「色をも香をも」と思ひ侍りて、鉢ながらさゝげまゐらするを、かりそめにも御目とまらば、花もはえある心地し侍らんかし、あなかしこ。

田津木久子

年あらたまりて、何事かおはしますらん、一日さふらひて、御はぎこととも聞えさせ侍らばやと思ひ給へられながら、何くれと打まぎるゝことの侍りて、いまそもえはたさぬつみは、さる方におもひなだらめてよ、かねて知らせ給ふごとく、老たるものゝ、いたく盆栽をこのみ侍りて、去年より、はやう來ん年のはじめには、梅を咲かせばやとて、心を盡し侍り

しか、そのかひありて、昨日今日はゝゑみそめ侍れど、一鉢まゐらするになん、さして珍らかにも侍らぬ物から、たゝ老いたる人の心盡しを、いたづらにせさせまじとてなん、御なぐさみにもなり侍らむ、いとうれしうこそ、萬はたいめの折にとて、かしこ。

藏田鏡子

春としいへど、餘寒今に去りかね、近きほとりの山は、未だ白雪も消えやらねど、火をけうちよせ、寒さを去のぐけふの寒空、御身には例にかはらず、文机によりかゝらせ給ふらむと、推し參らせ候、あまり御勉學にのみ心よせられなど、御身をいため給はむもはかられず、されどをり〳〵は庭面など打ながめ給ひなど、御心地もさはやかに、御勉學一入まさりなんと存し侍り、昨今手前方の盆梅、枝ぶりはあまり面白くは候はねども、やう〳〵春知り顏に綻び初め候まゝ、使をして送り屆け申候間、庭打ながめんと玉だれをかゝげ給ふをり。御慰のしろにもなりなど、いとゞうれしき事にこそ、いづれ近日參上の心くみにつき、御そどにて寒梅の御評うけ給はり度き考へに存候、先は一寸一筆用向のみ、目出度可祝。

服部勝美子

年たちかへりて、昨日けふ寒のけはひ、何となく麗かになり侍りしより、日あたりよき南表の園生の盆梅、はや氣色はみはゝゑみ初め、ゆるやかに風吹く風のねならずにほふは、いはん方なく侍るまゝ、手折りて御歌の料にもと一枝參らす、またやう〳〵三つ四つ咲き出しまゝに侍れと色をも香をも知る君の御袖に匂ひなは梅もいと嬉しみて、一しは打笑らむと思ひ侍りてなん、かしこ。

松岡濱子

そのゝ梅が枝は、いまだなか〳〵にひらくべきけしきはなけれども、こは朝な夕なつちかひて、日毎ひあたりよき所へ出しやりし故にや、早や二つ三つ咲き初めて、得ならぬ香をはなちさふらへど、いまだ谷木にて、枝ぶりのふぜいは少なけれど、一鉢御目にかけまつりぬ、御文机のかたへの友となしたまはゞ、いと〳〵うれしかるべくと、一ふで添へ侍り〳〵かしこ。

内田つる子

あらたまりぬる年のはじめは、何となうこゝろのと

かにて、ふる年のことゞも、うちわすれて侍りしに、南なる窓のすき間より、吹き入るゝ風のえならぬ香に、まづ心ときめきせられぬ、やをら立ち出でゝ見侍りしに、窓の下にすゑおきたる盆梅の、三つ四つばかり、春知りかほに咲きいでたるが面白う、あはれ此のめでたき花を、色をも香をも知る人もこそとおぼえしが新しき年のはじめの御料ともならむ梅もいかばかりうれしからましとて、そのまゝまゐらするになん。

師岡千代子

昨日は、いと早う、年の始のほぎことたまはり、いと忝くなん、いよゝ御あたりのどかに、めでたき御いはひごとゞも候ひつらんと、おもひやられ侍りさては、これなる鉢の梅よ、祖父が、去年の春、月が瀬の梅見の歸さ、苗にて持て來て、例のすさびに、培ひ水やり、肥料よ、暖室よ、とゝ獨りとりまかなひつゝ、若しも、稀々にも咲き出でなば、御覽ぜさせんなど、語らひ居しに、立ちかへる年と共に花さき出でゝ、思ひの外に、數も多く、香も春より先きの物とも思はれねば、とく奉りてよと、老の一向心に、しばしば申し出て侍り、花鳥の色香に、富ませ給ふ、御あたりには、差し出すべきものとも、おぼえ侍らねど、老人の心づくしは、君ならで、誰にかと、思ふ〳〵まゐらす、鶯さそふしるべの匂ひは、あらずとも、あはれとだに、見給はゞ、いかに花も、人も、面起しならんかし、萬は、近う侍はん折に、きこえさすべくなん。あなかしこ。

田谷秀代子

こその秋より、思ひたち、心してむろにおきぬる梅の、如何あるらん、とても都の如く新年のながめに、床におくほどにはえなるまじなど、かこちながら取りいでしに、おのがこゝろの届きしにや、蕾ふくらみ、明日あたりは、一ひら二ひらゑみそめやせんと思ふばかりに見ゆるものから、枝ぶりもなく、たゞ梅と云ふ名のみにて、富みさかえさせ給ふおんもとへは、まゐらすべうもあらねど、たゞ〳〵早く咲きけんか珍らしく、おのれ獨りながめんも心なきわざに侍れば、なめけなれど、一鉢さゝげまゐらするなり、いかであはれとながめさせ給ひてんや、

たてまつる心は深きくれなゐの

にほひぞこもる梅のひともと

山崎玄つ子

春の初めの御ほきことヽは、とり〳〵にことしげくれはすらんとれしはかりまつりぬ、この梅の一本よ、いつの年よりも、はやう咲けるが、ことに香のなつかしう侍れど、鶯の初音待つしをりともなりなんと、色をも香をも知る人にとて、贈りまゐらするを、とり納めたまはらんには、いみじきめいぼくにこそ、あなかしこ。

降田槇子

暦の軸の改まりて、何となく、長閑にればね、侍るを、如何にか、おはしますらん、御祝の盃の、数重ね給ひつらん、と推しはかり侍りぬ、さても知らせ給ふごとく、かねて花好の祖父、老のすさび、にとて、心いれて、つくりし、盆栽の梅、御代の初春を壽きてにや、昨日今日三つ四つほころび、そめたるが、いとも、めづらしく、あいらしけれど、日頃好ませ給ふ、君にとて、紅梅一はちを、送りまゐらするになん、あはれ、さヽぐるものは、いとさヽやか、なれど、此花の深きかをりと共に、心の底を、くみ給ひて、ことしもかはりなく、交らひたまひてよ、何れ近きうちにさふらひて、つもる物語きこえさすべくなん、あなかしこ。

名取正代子

冬の初めつかた、例の花うる翁の、はちうゑなど、あまたもて來たるが中に、梅のよき程なるが、二本どかり見えつるを、わがなひ侍りて、いかで、はやううるはしう咲かせてしがなと思へは朝な夕な、あるは土かひ、或は水かひ、あるは日あたりよき方にむかはしめ、寒き日には、室の内に取り入れつヽ、火桶いだかしめなどして、心の限り、やしなひ侍りし程に、嬉しくも、きのふけふ、数ふるばかりに、ほころびそめ侍りぬ、御わたりのに引きくらべては、何斗りのにほひも侍らざらめど、よそのより、はやう咲きたるが、めづらしうて、一本御らんぜさするになん、いかで御庭のかたほとりに、おかせ給ひて、みいとまのひまにも、かへりみ給はゞ、こよなき花のめいもくにこそ、あなかしこや。

鳥飼千重子

年あらたまりぬれど、何とならなほものたらぬ心地

なんせらるゝ、かゝる折にこそ、鶯の聲もがなと、まど打ちあけて見出せど、雪の内よりおぼつかなく思はせたるが鉢植の梅の、三つ四つばかりけしきばみほゝゑみいでしに、あはれいつのまにかと、まづうれしくおぼゆるも、折ふしに心とゞかねど、枝ぶりなどは、いかで世のものにくらぶべくも侍らねど、わざとならぬさまの、なか〳〵にをかしからんなどおぼゆるも、おのが心の引く方にや侍らん、さはれ、ことしいつもよりいとゞくほゝゑみ侍るまゝ、色をも香をもしる人にとて、鉢のまゝにて參らするを、あはれとおぼしめさば、學びのまどの折々にながめ給へよかし、さてはまた、御歌の料にともし給はゞ、いともいともうれしかるべくなん、かしこ。

長山孝子

あらたまりては、何事をかなし給ふらん、野山の雪の景色の去年のまゝなるに、春もまたたゝねど、鶯の初音をまつも心もとなくてなん、さるを、去年より心をこめたる、室の梅のいましも、さかりにほゝゑみ侍りければ、鶯の初音にも、まさる君がことの葉を、きかまほしくてさゝぐるになん、かしこ、

新田のり子

立かへる年の始めの御壽は、千代に八千代と祝ひ納まゐらせ、皆々樣にも、御けしきうるはしく、いよゝ御榮え給ふなん、此上なきよろこびに候、妾事もいと健かに、齡をかさね候へど、御心安う、おぼし給はりたく候、さてかねてあひ知れる、人おほくの花の内にも、いたく梅をめでゝ、年頃いろ〳〵のしなをあつめ、手づから養ひたてゝ、此頃は雪霜にこほりつゝも、笑み初め候とて、二三種送りこし候、かばかりのものを獨りにて、見はやし候はんも、をしく候まゝ、この一はちを撰ひ、御目にかけ候、文机の片はしにかざさせ給はんには、妾のみか、花の面目、これには過ぎじと、存ぜられ候、かしこ。

木川里子

昨日といひ、今日と過して、はや明日一日の今年となり侍りぬ、何くれと、春待たまふ御いそぎに、暇なくわたり給ふらん、さては、此の梅さきつころより、心をこめて、やしなひつるかひありて、寒さをよそに、やゝ咲そめ侍れど、花待がほの籠の鶯よりさきに、色をも香をも、しらせ給へる君に、と一鉢

贈りまゐらす、父君母君の初春の千代の御かざしと
御ろなはし給はゞ、こよなき本意になん、こしこ。

寄鶴祝　有坂清子

君が代の八千代數へてひさかたの
美空にたかしあしたつのこゑ

松影映水　木村兼子

大君のめぐみあまねきまつか枝は
千代へんかけを水にうつ玄て

同　楠精子

千とせへしみその丶まつは大君の
めぐみの色をみつにうつせり

年の始に幼き人々の遊ふを見て　河野文子

新らしき年のはじめにをとめ子か
つくものとけし手まり遣はこ

都初雪　長洲餘野子

ときならぬはなとみゐけり玉敷の
みやこにふれるけさのはつ雪

老人　島田輝子

幾度かむかしかたりをくりかへ玄
かたらふ老にわれもなりなん

童子　町田繁子

心なきをさなあそひもはと／＼に
みの上にこそしなはあるらめ

阿蘇山にのぼりてよめる歌　西澤静春子

たちのぼるけぶりいや高き大空に
すかたうこかぬ阿蘇の玄は山

同　長野孝子

阿蘇か峰のけふりのすゑの白川は
ふもとめぐりて帶とみゐけり

同　佐々有鄰子

群山はけふりのうちにうつもれて
ひとりそひゆる阿蘇のたか嶽

曉の歌　橋本丹江子

ほの／＼とあけゆく空になほ殘る
月はいつこをてらすなるらん

十一月の四日に初雪ふる　長田年子

こん年のゆたけきしるしみゐに見

今朝はつ雪の峯につもれは

明治二十九年の天長節をいはひ奉りて

仝　人

みやこ人も片山さとのしづの女も
御代のさかえをいはふけふ哉

仙人

女子高等師範學校生徒　戸次ひさ子

山にすみ、道術を行ひ、年をへても老いせぬ人を仙人といふ、このこと古き文どもにもあまたいでたれど、其方法たしかならず、あやしきことのみ多くて、衛生の上よりたしかめられしをきかず、されどこたひ南摩先生に支那古來より神仙の說あるものは、信すべきものなるかをとひしに、先生こたへて、われさきに、神仙の術をきゝ、一篇の文をかけり、之を汝に示さんとのたまひて、記仙といふ文を示したまひき、われよろこびて之をよむに、其事實文章誠に奇にして我ながら仙境にあそぶが如き心地したりき、況や其仙術を知れる人、支那の人にあらずして、我日本帝國の人にあるに於てをや、今其仙術といふものゝ大略を記さんに、第一空氣を吸ふ事、即晝夜凡そ六回にして、一回に五十吸にて、穀をさけて生活し得る事、第二に、朝と夜とに、身体の諸部を摩擦する事の二つにて、九年かくの如くにせば、仙人となるべしといふ、此法を行へる人の言に、仙術を行ひてより、心氣爽快にして、少しの恙もなしと。

われ之によりて思ふに、仙人にあらずとも、其法のよろしきものをとりて行はゞ、必其功あるべし、其吐納の術の如き、肺を清くする爲に、其功ありて、攝生家のとるところなり、身体を摩擦する事も、亦皮膚の働きを進むるために、甚だよろしからん、されど人々よく此法を行ひなば、山にすまずとも、穀をたゝずとも、長壽を保つべきなり、皆人試みたまへかし。

丙申晩秋飛鳥山に遊べる記

岩橋浪江子　明治十六年八月生

頃は霜月十日、朝まだきより、校への門は樂しげなる人もて滿たされつゝ、けふは如何なる吉日ぞと喜びさけぶ聲かしまし、やがて七時の鐘に、隊をとゝのへ、勇み〳〵てぞ立ち出でける、さては運動にとて出づるならむと、往きかふ人毎に、心づかれぬ、か

くて一行、飛鳥も及ぬ早さに、はや四つ谷ぞ、牛込ぞと、越ね行きて、小石川に入り、本郷とすぎ、十時と云へるに、北豐島なる飛鳥の山にぞ着きにける、至れど、いたく物はしさに、喉にもとめず、息をもつかず、飲みつ、食しつ、やがてあたりに目をそゝげど、一株の枯櫻、忽ち二もと三もと、はては山一面に見わたされて、花時の雜鬧いかはかりそと思ひやらる、今は人蔭をだにとゞめず、いと〳〵幽しき心地すなるに、花のあはれを汲み分けつゝ、われにもあらでたゝずむ折柄、下過ぐる汽車に、林先生の乘らせ給へるを、迎へ參らせずや、とく〳〵と忩がれて、走せ下り、いざ此方へと先に走りて、又もや登る、山上におひつおはれつして、暫し仙界に樂しめり、かくてあらむ、いつ名殘のつくべくもあらず、山に戲れ、水に遊ぶは、また一入の興ならむと、あかぬ名殘をあとにして、瀧の川へと進み行きぬ、未だ半町ならざるに、雪かとまがふ流れあり、水石に控かれて、白き色をなすさまはいはれず、これを人事に例へむいかにと、心をとめて權現堂を過り、程なく目させる所に至りぬ、紅葉にはふ名所にきて見る、秋の景色とて、紅葉の錦敷きはへて、樹毎に垂るゝ短冊も、心ありげにひらめけり、とかうして此所を立ち出づれど、歸路には足も捗らず、猶目に見ゆる山のさま、耳に聞ゆる水の音、さては錦かけたる粧して、四方見渡すはてもなき稻の雲、彼方此方とわけ分けつゝ、辛くも染井の墓地に出でぬれど、又もや駒込の通りにかゝる、路長きに飽きぬるを、砲兵工廠の先見れど、うれしき滊車の黑けぶり、彼所に早く行かむやと、走りつきてぞ打ちのれど、滊車は長路を飛ひ行きて、四つ谷につき、こゝにて下り、紀伊國坂、一つ木通りを過りて、午後の四時過に歸校せり、およそ世に樂しき事は、さま〴〵あれど、かゝる例なき樂しさは、御惠み深き君たちと、睦しき中とのたまものなりや。



天つ日嗣の高御位は
天地の共動きなく、皇
國の御榮は、いや年の
はに、榮えゆかんとあ
らたまの年のはしめ
のことほきききこに申
すまなん。

明治三十年一月一日

國光社
社員一同

明治三十年自一月至六月女鑑歌文兼題

一月
- 五日歌……郡新年 文……盆梅を贈る
- 廿日歌……若水 文……餘

二月
- 五日歌……山家初春 文……雪を見て
- 廿日歌……湖上霞 文……電話

三月
- 五日歌……餘寒 文……出産を祝ふ
- 廿日歌……田家梅 文……樂しみ

四月
- 五日歌……野遊 文……養蠶
- 廿日歌……對花言志 文……遠國へ出て立つ人をおくる

五月
- 五日歌……新竹 文……新茶をおくられし返し
- 廿日歌……夕水鷄 文……蛙を聞く

六月
- 五日歌……曉郭公 文……雨中待友
- 廿日歌……夏憶舊 文……朝顔

米穀は我國民上古よりの常食品にして一日も無かるべからざる物たり然るに從來此の國家民人に重大の關係を有する唯一の生産物にして此に關する著書多くは杜選疎脱見るに足るべきもの尠なきは世人の常に遺憾とせる處也恰も好し今回岡勇次郎君嶄新の意想精細の查覈とに依りて本書を編し凡て米穀の社會に及ぼすべき關係を詳にせらる本書は內外經濟社會の參考となるべきは勿論農商業者必携の良書にして米穀需給增減の理由價格の變動及び旣に來りつゝある現象將に來らんとするの現象等は一讀知悉するを得べし

●副島伯題辭●富田鐵之助君序文●文學士濱田健次郎君校閲●岡勇次郎著

日本米穀之將來

及米價變動の源因

全

定價金參拾錢
郵稅金六錢
郵券代用一割增

第一編には米の生産地及産額○米の內國消費○米食と衛生との關係○常食品として國家經濟上米の最も適當なる理由○將來に於ける米の位置

第二編には日本米穀輸出の由來沿革及概況○輸出手續○諸外國に於ける米の生産及供給概況○米の需用國及其市場幷に日本米と外國米との評判比較

第三編には米價變動の源因○米穀取引所○最近二十三年間米價の小歷史○米價の國力消長に及ぼす關係○米穀貯蓄論○結論

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

價格低廉 書籍及雜誌 勉強取次 發送敏速

謹賀新年 并而 祈御愛顧各位之萬福

東京神田表神保町 電話番號(本局)二百四十八番

東京堂 大橋省吾

東京堂は去廿三年三月書籍雜誌の**卸小賣大取次**を開業以來專心地方各位の御便利を企圖勉强致し候處非常の御好評を辱ふし目下毎月取扱ふ所の各種書籍雜誌の部數、十數萬部の多きに上り**府下同業雜誌取次店中**の**第一位**を**占**め候如き繁盛に赴き候段難有奉感謝候付ては從來の店舖にては手狹を感じ不都合不尠候に付き**舊冬工事**を**起**し修築を加へ**店舖**を**取廣**め**落成**候に付**本年**より**一層奮勉**致し**業務**を**擴張**し**東京堂獨特**の**長所**たる**價格**の**低廉**と**發**送の**敏活神速**と**取引**の**正確懇切**とを以て萬般に注意を加へ御便利を專一とし勉强仕候間多少に不係倍舊の御愛顧續々御注文の程希上候也

地方同業諸君にして諸雜誌原價表御入用の方は御申越し次第送呈仕候

御注文は凡て前金御送附の事●郵便爲替は必らず拂渡局を東京神田一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振み込被下度候●郵便切手代用は必らず一割增にて御送附の事

書籍代價等御問合せの節は凡て返信用として往復はがき又は郵便二錢切手御送附あれ詳細迅速回答仕候

三十年一月大改正 **諸雜誌總目錄** は壹萬部限り無代進呈●御入用の諸君は郵便税二錢切手御送附次第郵呈す

書籍雜誌委託販賣部擴張

書籍雜誌を新規發行の諸君にして一手發賣方を弊堂へ御委託相成候へば賣弘め方は充分御滿足出來候樣盡力勉强可仕候間御委託相成度諸君は御申越被下度早速參上御相談可仕候

女鑑第百貳拾三號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊(三ヶ月分)	五十五錢
	十二冊(半年分)	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十年一月四日印刷
同年一月五日發行

發行兼印刷人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
編輯人 同 山根勇藏
發行所 同 (電話番號本局八八) 國光社

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)
(印刷所 東京國光社印刷部)